鹿大広報

No.157
July/2001

編集・発行
鹿児島大学
広報委員会

特集：全学合同研究プロジェクト

http://www.kagoshima-u.ac.jp/

Kagoshima University

鹿大広報

【July 2001　No.157】

CONTENTS

目　次

■　特集　　全学合同研究プロジェクト

鹿児島大学全学合同研究
プロジェクトの大きな意義 ……学長　田中　弘允…… 3

大地・食・人間の健康を保全する環境革命への試行
―鹿児島県をケーススタディーとして― ……農学部　岩元　　泉…… 4

新しい関係性を求めて
―コミュニケーションの諸相― ……法文学部　木部　暢子…… 8

〈環境プロジェクト〉
開放系／半開放系のゴミ処理と地域資源循環型
社会の構築に関する研究 ……農学部　藤田　晋輔……12

地域学の創造
―新しい鹿児島学― ……法文学部　高津　　孝……16

離島の豊かな発展のための学際的研究
―離島学の構築― ……法文学部　皆村　武一……20

■　学内だより

○随　　想 ……理学部　西尾　正則……24
○保　　健 …… 心身症 ……保健管理センター　森岡　洋史……25
○留学生日記 ……胡　俊、ヌライシャムスズラ・ロザイディ……26
○研究室紹介 ……水産学部海洋社会科学講座　島　　秀典……27
○サークル紹介 ……バスケットボール部、ヨット部、法学研究会、表千家茶道部……28
○新任教官紹介 ……30
○学内ニュース
総合研究博物館、機器分析センター、学生部移転 ……33
情報公開窓口、入試情報開示制度 ……34
○図書館だより ……35
○動物病院の紹介 ……農学部附属動物病院長　阿久沢正夫……35
○行事予定 ……36
○編集後記 ……36

表紙デザイン

「大学から地域へ、情報が広がっていく様子を色と形で表現した」

教育学部　助教授　美術教育講座　小江　和樹

特集 全学合同研究プロジェクト

鹿児島大学全学合同研究プロジェクトの大きな意義

学　長　田中　弘允

人類社会は文明の進歩と共に複雑さを増し、様々な社会的課題を抱え込むに到っている。最近我が国においては、環境、食糧、健康、いじめ、凶悪な犯罪、財政危機などが緊急に取組むべき課題として注目されている。これらの課題は複雑な社会を背景にしているため、その解決には、従来のような単一の専門領域の研究では不十分であり、それに代わって多様な専門家による共同研究による解決が不可欠となっている。

これらの諸問題は、今や極めて大きな範囲に係りを持ち、常に増悪の方向に進み、ますます問題の解決が困難になるという傾向をもっている。国や地方自治体などに任せることなく、全人類１人ひとりがそれぞれの立場に応じてその解決に向けて努力しなければならない。そのような中で大学人はその使命として、積極的にこの問題に取り組むべきではないかと思う。

そもそも大学は、文化の継承、知的生産、人材育成等によって社会に貢献することをその使命として、それぞれの役割を果たして来ている。学問領域についてみると、それぞれの学問体系にしたがって、一定の範囲が定まっているので、個別の学問領域だけでは、上に述べた社会的課題のごく一部しか研究できないことは明らかであり、ここに多様な専門分野からの研究者が合同して問題解決に当たることが要請されるのである。これはいわゆる学際的研究という範疇というよりは、個々の社会的課題の解決を目的とした学問の誕生が期待されている。

２１世紀を生きる大学人は、この新しい学問の創造に向けてその使命を果たさなければならないと思う。そして、様々な問題を解決するための現実面における具体的政策を立案し、社会へ向けて提案しなければならないのである。このようにこの新しい学問は領域の広さ、社会との深いつながり、社会への積極的な姿勢などの点において、従来の学問と異なっており、それが果たして学問であるのかという懸念をもつ大学人もいるであろう。また、伝統的かつ系統的な学問分野との関係をどうするのか、あるいは大学と社会とがそのように区別がなくなって果たして純粋学問が保てるのかなどの問題も出てくる。

大学は時の権力から支配されることなく、自主自律に基づいて遠く未来を見つめつつ学問を行うという使命は真に大学の中心をなすものである。従来の伝統的学問分野との関係についていえば、これらの学問が新しい学問の基礎となるものである。両者への重点のおき方については別に考慮すべき問題である。

大学と社会との関係については、我が国では、大学が象牙の塔といわれるように社会から孤立していた時代もあった。しかしながら大学が社会から大きな期待をかけられる現代においては、社会との関係がより緊密になることは必然であろうと思われる。

学問の自由を保ち、大学が自主自律の下に運営されることは大学の存在において必要欠くべからざる条件であるので、この条件が常に保持されることが大切であり、大学人はそれに向かって常に努力しなければならない。

我が国の近代化は、欧米先進国の様々なものを取り入れ、外国に追いつき追いこせのキャッチアップの作業の連続であったといわれている。学問についても同様であった。欧米先進国で生まれ育ち確立された学問は、これらの国の歴代の人々、風土、歴史、宗教などが養分となって出来上がったものであるが、これらの国から移植されたわが国の学問は、日本の固有の養分から育ったものではないという弱さをもっている。わが国の学問を日本社会や地域社会という面から再検討を行うためにも、社会との双方向性交流は極めて有意義であると思われる。

本学では、社会的、地域的、地球的課題の解決に向けて、すでに4年以上前から全学合同研究プロジェクトを立ち上げいずれも一定の成果をあげつつある。

それらは、　大地・食・人間の健康を保全する環境革命への試行－鹿児島県をケーススタディーとして－（平成9年度発足）、　新しい関係性を求めて－コミュニケーションの諸相－（平成10年度発足）、　環境プロジェクト、開放系／半開放系のゴミ処理と地域資源循環型社会の構築に関する研究（平成１１年度発足）、　地域学の創造－新しい鹿児島学－（平成12年度発足）、　離島の豊かな発展のための学際的研究－離島学の構築－（平成12年度発足）の5プロジェクトである。

これらの成果が、新しい学問を生み、政策提案を行い、必要なら政策の実行にまで進み、人類を含む生物とすばらしい地球の未来に貢献できることを期待したい。

特集 全学合同研究プロジェクト

「大地・食・人間の健康を保全する環境革命への試行」
―鹿児島県をケーススタディーとして―

農学部　岩元　　泉

1．はじめに

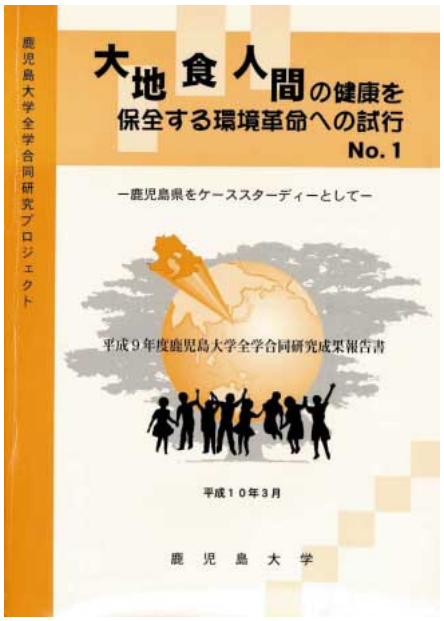
南日本新聞は1996年1月から1997年4月にわたって「新しい食と農のかたち」を連載しました。私たちの食べ物と健康に様々なゆがみが見られ、農業が本来の姿をなくしているという危機感に駆られた新聞社の英断による環境保全型農業、有機農業を軸に据えた長期取材記事であり、大きな反響を得ました。その反響の一つが鹿児島大学における全学合同研究プロジェクト「大地・食・人間の健康を保全する環境革命への試行」でした。田中弘允学長はプロジェクトの開始に当たって「食べ物と健康は密接な関係にあり、その食べ物を作り出すのが農業だが、われわれは本当に健康にいい食べ物を供給されているのか、みんなが不安を持っており、これを解消するのは国民的ニーズである」として農業県である鹿児島県の総合大学として地域に貢献するために本プロジェクトを立ち上げたと述べておられます。そして文字通り農、医、歯、工、水産、理、法文、教育の全8学部と、医療技術短期大学部の研究者39名で本プロジェクトが立ち上がりました。

2．初年度（平成9年度）

初年度は立ち上がりの時期が遅れ、平成10年1月31日に最初のシンポジウムが開催されました。シンポジウムでは本研究プロジェクト初代事務局長であった金澤晋二郎農学部助教授（当時）が「大地の健康」と題して基調講演を行い、つづいて12の研究課題についての発表が行われました。シンポジウムは大きな社会的関心を集め、学内外から行政関係者、農協職員、農家、市民および研究者など300余名が参加し、期待の高さを伺わせました。

研究プロジェクトは三つのグループに分かれて取り組まれました。第1は「大地の健康と持続的食糧生産」として、有機質肥料、家畜排泄物の利用、有機農法、有機農産物の栄養評価や消費者意識、など、農業に関する分野の研究課題、第2は「食物と健康」として、残留農薬の影響、緑茶の健康への効用、有機農業による寄生虫感染、食品添加物の味覚効果など、医療と健康に関する分野の研究課題、第3は「地域環境と人間生活」として地下水浄化、環境汚染の評価、環境保全技術、環境保全教育など、環境に関する分野の研究課題に大別されました。その研究成果は成果報告書として平成10年3月に刊行されました。

（平成9年度研究プロジェクト委員長堀口毅、事務局長金澤晋二郎）



平成9年度研究成果報告書

3．2年目（平成10年度）

2年目の平成10年度には本研究プロジェクトへの参

加研究者が大幅に増え、140名（60研究課題）になるとともに、鹿児島県農業試験場や他大学研究者との共同研究も進みました。研究領域が大きく広がり、様々な課題が取り上げられるようになりましたが、現代の問題の深さ、多様性を反映していると感じられます。

平成10年度の成果は3月に刊行されましたが、そのうち、12の研究課題については成果報告会において公開されました。成果報告会は平成11年5月8日（土）に鹿児島大学稲盛会館で開催され、多数の研究者、市民、農家が参加しました。

研究成果報告が行われたのは次の12課題です。

1．合鴨農法における微生物およびアゾラ利用が雑草発生に及ぼす影響（萬田正治）
2．スーパーにおける有機青果物取扱いの現状と課題（坂爪浩史）
3．家畜排泄物を主体とする有機質資材利用による環境保全型農業の確立（遠城道雄）
4．摘果廃棄されているメロンならびにメロン果実胎座由来のプロテアーゼの食品工業分野における有効利用（金田信）
5．内分泌かく乱物質（環境ホルモン）のホルモン標的臓器への影響－顕在化した生殖異常と激発する乳癌への抜本的予防策としての有機農業－（吉田浩己）
6．残留農薬の次世代に及ぼす影響（宮田晃一郎）
7．緑茶のＡＴＬ発症予防効果－緑茶ポリフェノール成分のＡＴＬ細胞に対する増殖抑制効果－（園田俊郎）
8．摂食中枢・学習中枢の神経機能に対する偏食の影響－生活習慣病の発症機序へのアプローチ－（矢田俊彦）
9．人間の生活と環境保全教育－内分泌攪乱物質についての情報と教育－（八田明夫）
10．樹木の共生窒素固定菌と環境保全・回復（東四郎）
11．屋久島における地域資源のリサイクルを目指した永続的活用と環境共生（藤田晋輔）
12．衛星データを用いた立木量の推定（石黒悦爾）

（平成10年度研究プロジェクト委員長堀口毅、事務局長冨永茂人）

4．3年目（平成11年度）

奄美における水問題研究成果報告会

第3年目に当たる平成11年度は三つの班毎に重点課題を決めて取り組みました。第1班の大地の健康と持続的食糧生産では「合鴨農法」を重点課題としました。このグループではこのほかに堆肥利用とその効果に関する研究、有機農産物の流通、加工、貯蔵、乾燥さらに消費者意識と教育効果などが課題となりました。第2班では、「カエルの矮小化現象」「ＰＣＢの無毒化」が重点課題となりました。この他、緑茶のＡＬＴ予防効果、発癌抑制効果、食生活・食品と健康との関連に関する研究、環境ホルモン・残留農薬の影響に関する研究などに取り組まれました。第3班では「屋久島の

屋久島におけるシンポジウム

環境モニタリング」と「水質浄化問題」が重点課題となりました。この他、共生菌による環境回復に関する研究、環境教育・食生活教育に関する研究が行われました。

本プロジェクトの成果を出来るだけ地域に還元することをめざして、成果報告会が地域でも開催されました。平成12年2月18日には奄美大島名瀬市において本プロジェクトの第3課題グループのうち、水問題研究グループ（幡手泰雄代表）が成果報告会を開催しました。報告会では「石灰岩地域の地下水」（井倉洋二）「ヒ素の化学形と毒性」（前田滋）「地下水に含まれた硝酸性窒素の除去」（横山勝一）の講演と9つの課題についてのポスターセッションが行われ、奄美の市町村担当職員など関係者が参加しました。

屋久島においては平成12年2月22日屋久島環境文化研修センターにおいて「屋久島の森林と人」と題するシンポジウムが開催され、以下の6つの課題、「樹木の共生窒素固定菌と環境保全・回復」（阿部美紀子）「キノコの知られざる世界―森林とキノコの共生―」（馬田英隆）「屋久島の森林の登山利用―自動カウンターによる把握―」（枚田邦宏）「森林認証、木材認証についてのアンケート調査結果」（服部芳明）「小杉谷周辺屋久杉林分の更新について」（寺岡行雄）「人間の生活と環境保全教育―野生生物の観察を通した環境教育―」（八田明夫）についての報告が行われ、多数の市民、自治体職員が参加しました。

平成12年2月23日には「アイガモ農法ワークショップ」が鹿児島大学において開催されました。これにはアイガモ農法に関わる多数の研究者、農家、市民が参加し、基調講演（萬田正治）、8つの研究報告と7つの実践報告、さらに特別報告（古野隆雄）が行われました。

合鴨農法ワークショップの様子

基調講演では、アイガモ農法が環境保全型農業の一つとして国の施策にも反映されるようになったこと、アイガモ農法の効果は、除草、害虫駆除、肥料の三効果に加えて、アイガモによる耕耘と水の撹拌効果、稲の刺激効果があることが明らかになり、収量の上でも慣行農法に劣らないと述べました。アイガモのひなの生産と処理にも目処がつき、農家の経営の上でも有利であること、アジアにも広がりつつあることなどが紹介されました。

平成11年度の全体の成果報告会は平成12年3月4日に鹿児島大学稲盛会館において開催され、3つの課題分野からそれぞれ１つの成果報告が行われたほか、全研究課題についてポスターセッションによって成果報告が行われました。

（平成11年度研究プロジェクト委員長堀口毅、事務局長岩元泉）

５．4年目（平成12年度）

平成12年度は研究課題を12テーマにまとめ、研究課題を再整理し、合計48の課題が取り上げられました。第１班では大地の健康と持続的食糧生産をテーマとした18課題が取り上げられ、土着菌を利用した堆肥の効果や、有機農産物の栄養評価、焼酎廃液の利用などの研究が行われました。第2班では食物と健康をテーマとした16課題が取り上げられ、有機農産物の抗腫瘍活性、抗ウィルス、抗菌作用、環境ホルモン、味覚、緑茶の癌予防効果などの研究が行われました。第3班では地域環境と人間生活をテーマとした14課題が取り上げられ、森林環境教育、環境モニタリング、有害物質の無害化、環境保全・回復技術についての研究が行われました。

土着菌ワークショップのパンフレット

土着菌の農業への利用に関してはワークショップ「畜産における土着微生物を利用」を開催し、学内外から800名を超える研究者、農業者、市民が参加しました。土着菌利用は誰にでも出来る安価な技術として鹿児島県内の農家や堆肥センターで活用するところが増えており、研究成果の応用が具体化した事例だといえます。

また屋久島における登山利用のモニタリング調査についての報告会、森林環境教育についての公開講座が研究成果の一環として開催されました。平成12年度研究成果報告会においても前年度と同様、全課題の研究成果をパネル展示と口頭で発表し、280名を超える参加者を得て、熱心な討論、研究交流が行われました。

本研究プロジェクトでは毎年度研究成果報告書を作成し、学内外に配布して広く活用することを薦めています。

（平成12年度研究プロジェクト委員長西中川駿、事務局長岩元泉）

6．5年目（平成13年度）

平成13年度は、本研究プロジェクトを大幅に再編しました。本研究の成果の一部はすでに地域社会に還元されていますが、今後さらに特定地域を対象にした学際的なプロジェクトとして発展させるために、「網掛川流域環境共生プロジェクト」を発足させました。これは溝辺町の網掛川上流に位置する竹子地区においてアイガモ農法を実践することによる流域環境の変化を観察し、自然と共生した地域づくりを行い、唱歌「ふるさと」の歌えるような環境を復元しようというものです。これまでのプロジェクトの進め方と違い、地元の自治体や関係団体とプロジェクト委員会をつくり、①里山・里地の環境復元をめざす、②安全な農産物の地域流通を促進し、農家の生活の安定をめざす、③子供たちが自然環境を農業の大切さを自覚する教育をめざす、④循環型農業をめざす国際交流・協力を推進する、というプロジェクト目標に沿って、鹿児島大学の学際的なプロジェクトメンバーが参加し、地域を舞台に研究活動を進めようとするものです。

（平成13年度研究プロジェクト委員長萬田正治、事務局長岩元泉）

特集 全学合同研究プロジェクト

新しい関係性を求めて
―コミュニケーションの諸相―

法文学部　木部　暢子

20世紀から21世紀へと時代が移り変わった現在、種々の局面において必ずしも好ましくない社会現象が発生しています。20世紀が抱え込んだ諸問題がここにきて一気に噴出した感があります。例えば、親子の断絶とよく言いますが、親子の断絶はいつの時代にも存在しました。従来なら世代間の感性や意識の違いとして把握されてきた現象です。しかし、現代における親子の断絶は、単なる世代間の違いでは済まされない要素を含んでいます。社会構造の変化、あるいは人間存在そのものの変化に起因しているように思われるからです。

親子の断絶に限らず、現在起きている諸問題はどれをとってみても社会構造の変化や人間の存在形態の変化と無関係ではないように思われます。従って、これらを解決するためには、従来の枠組みではうまくいきません。今や、新しい枠組みが必要とされています。

では、新しい枠組みとはどのようなもので、どのようにして築けばよいのでしょうか。ここで私たちは、現代における「コミュニケーションの不成立」という問題に注目しました。もちろん、現代社会の諸問題は多種多様で、原因もさまざまなのですが、社会のあらゆる場面で「コミュニケーションの不成立」が起き、その結果、人間関係が希薄になっている、これが現代社会の諸問題の原因の一つであることは、疑う余地がありません。「コミュニケーションの不成立」の原因を追求し、多面的なコミュニケーションの実現を再検討することによって「新しい関係性」を築いていくこと、それが現代社会の諸問題を解決する新しい枠組みの一つだと考え、このプロジェクトを発足させたのです。

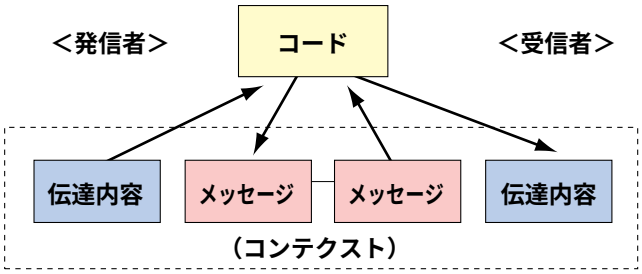
このプロジェクトに参加した研究者は、学内・学外合わせて11グループ、94名に上り、研究テーマも多岐にわたります。全てを紹介することはできませんが、グループごとに研究の一部を紹介することにしましょう。

1.「メディアとメッセージ」

「メディア」というと、一般にはマスメディアを思い浮かべるかもしれませんが、この研究では「メディア」をマスメディアに限定せず、もっと広い意味に用いています。対象としているのは、誰かが、ある通路を通して、誰かに対して、何らかの効果をねらって、発信したもの全てです。その意味でいえば、古墳から出土した土器も、学校行事として行われる記念式典も、また地域に存在する民間宗教も、立派な「メディア」ということになります。出土土器からは当時の宗教的・儀礼的側面や身分表示というメッセージを読みとることができます。また、カナダの帝国記念日の行事からはイギリス帝国との紐帯を維持した形でのカナダの国民統合というメッセージを読みとることができます。民間宗教に関する研究では、宗教者の語る宗教世界が地域住民とのコミュニケーションの中で再構築されていくという事例もこの研究では報告しました。

2.「コード」

情報伝達はまず、発信者が伝達内容をメッセージに置き換えることから始まり、次にメッセージを受け取った受信者が、それを伝達内容に置き換えることによって完成します。この一連の流れにおいて伝達内容とメッセージの橋渡しをするのがコードです。



池上嘉彦『記号論への招待』より

伝達内容が正しく伝わるためには、発信者の使用するコードと受信者の使用するコードが同じでなければなりません。図ではコードがコンテクスト（文脈）の枠の外側に出され、発信者・受信者双方にとって共通のものであることを表しています。

コードをこのように定義した上で、私たちは「鹿児島方言における言語コードの研究」と「文学の中に現れる言語コードの研究」の二つの研究を行いました。鹿児島方言の言語コードは共通語の言語コードとは異なります。また、同じ鹿児島方言でも年輩者のコードと若者のコードは異なります。共通語にしても日常会話における言語コードと文学における言語コードは違います。研究ではそれぞれのコードの持つ特徴について明らかにしました。

3.「情報の認識モデルとメディア交換」

脳内でどのような情報処理が行われているかは、21世紀に課せられた重要な問題の一つです。これが明らかになると、現在のコンピュータとは異なるタイプの情報処理機械や、それらを用いた知的コミュニケーションシステムの開発が可能になります。このような問題を背景に、私たちは脳を構成する神経細胞間でどのような信号のやりとりが行われているか、また、脳の情報処理を真似ると計算機上でどのようなことが可能になるかという問題に取り組みました。前者については信号と雑音を分離する新しい手法の提案、神経細胞間の信号伝達経路についての新しいモデルの提案を行い、後者については連想記憶を計算機上で実現する際、一部の人工神経細胞の活動を止めるモデルが有効であることを示しました。また、このような結果をネットワーク上のコミュニケーションに応用するために、ネットワーク上での手話によるコミュニケーションシステムを構築しました。

4.「コミュニケーションギャップ」

患者と医療従事者の間に発生するコミュニケーションギャップの問題について、私たちは医療従事者が患者に関する情報を受け止める際、ある特定の枠組みで情報を認知しているのではないかという推測を立て、調査を行いました。

調査は、架空の糖尿病患者A氏の情報を医師、看護婦（士）に提示し、A氏をどのような患者と受け止めたかについて自由記述で回答してもらう方法で実施しました。その結果、医療従事者の回答には、現在のA氏の状態をありのまま認知するよりも、A氏の状態・行動の原因を推測する傾向がある、A氏の現在の状態の原因を、A氏が「糖尿病を甘くみている」「意志が弱い」などA氏の認知や性格などのパーソナリティに帰属させる傾向がある、ということが分かりました。また、医療従事者のこのような受け止め方の傾向には、医療従事者のそれまでのそれぞれの経験が影響していることも明らかになりました。

5.「法的交渉」

私たちのグループでは、自治体・行政機関と住民とのコミュニケーションの問題、刑事手続きにおけるコミュニケーションの問題、契約交渉過程におけるコミュニケーションの問題、国際紛争の処理方法としての交渉の問題などについて研究を行いました。

6.「医療・福祉におけるコミュニケーション」

患者あるいは子どもといった弱者の立場を尊重

し、信頼関係を得て、良好なコミュニケーションを確立するにはどうすればよいかについて、いくつかの小グループに分かれて研究しました。研究成果は次のとおりです。

1）医学生のために患児と良好なコミュニケーションを作るためのマニュアルを作成し、小児は成長・発達の程度により興味や理解度に差があること、子どもに目線を合わせることなどについて述べた。

2）摂食障害者は健常者よりも社会的スキルや対人交渉場面の対処に自信が乏しく、対人関係で満足感が低いが、入院行動療法が効果的である。

3）がん告知にはコミュニケーション技術の向上、患者・家族を支援するシステム開発が急務である。

4）薬剤情報提供文書が薬に対する理解度の向上や飲み忘れ防止に役立っている。

5）感染症に関する偏見や差別の改善には知識の普及、イメージの意識改革、情報基盤の整備が必要である。

6）教育による普遍的ＨＩＶ感染予防等の重要性、

7）医療従事者・患者間のコミュニケーションと信頼関係には情報の共有が不可欠である。

7.「歯科医療と顔」

歯科医療における顔の位置づけを中心的な研究テーマとして、私たちは「顎変形症患者における顔体験」、「義歯患者の気分の評価にFace Scaleを用いる試み」、「外科矯正患者における 顔が変わる 体験」、「外科矯正適応の下顎前突患者における顔貌評価の特性」という四つのテーマに取り組み、顎矯正手術を受けた患者が自分の顔をどのように受け止め、また顔を通してどのような体験をしているか、新義歯製作の前と後で患者の気分がどのように変化したか、外科矯正治療を受けた顎変形症患者の手術後の体験、外科矯正治療を希望する患者が顔の13部位に関してどのような不満値を示すか、について報告しました。

8.「教育現場におけるコミュニケーション」

現在、教育現場で起きているさまざまな問題に対処するために、私たちのグループでは次のような研究を進めました。

1）教職員がメーリングリストを利用して教育に関する疑問や悩みを議論しあうことにより、教育現場にどのような効果を与えることができるか。

2）「いじめ」を題材とした授業や、「いじめ事件」に対する裁判の判決文を取り入れた授業を実施し、生徒が「いじめ」問題に自主的に取り組むための授業プログラムについて研究しました。その成果は『教師は何からはじめるべきか』（教育史料出版会）、『実践いじめ授業』（エイデル研究所）として出版しました。

3）オーストリアにおける言語教育の現状を報告し、これを参考にしながら理想的な国語教育、文学教育について研究しました。

4）通信衛星の持つ双方向情報伝送の有益性に着目し、衛星を利用した看護遠隔教育の実用化に向けて、具体的なアプローチを行いました。

9.「政策決定におけるコミュニケーション」

日本の政策決定のあり様は、現在、大きな転換期を迎えています。私たちは鹿児島県の過疎地域を対象に、住民生活と政策のインパクトに関する実情調査を行い、次のような知見を得ました。

1）過疎地域の高齢者集落に対する政策的な関与はあまり深くない。唯一の例外はデイサービスで、これについては多くの高齢者が生きがいと感じている。

2）地域保健政策の一環である歯科の集団検診では、個々の問題が山積していて、結局は健康情報の多くが無駄になっている。

3）自治体の長期計画については、コンサルタン

ト会社任せから住民参加への移行趨勢を見出すことができる。

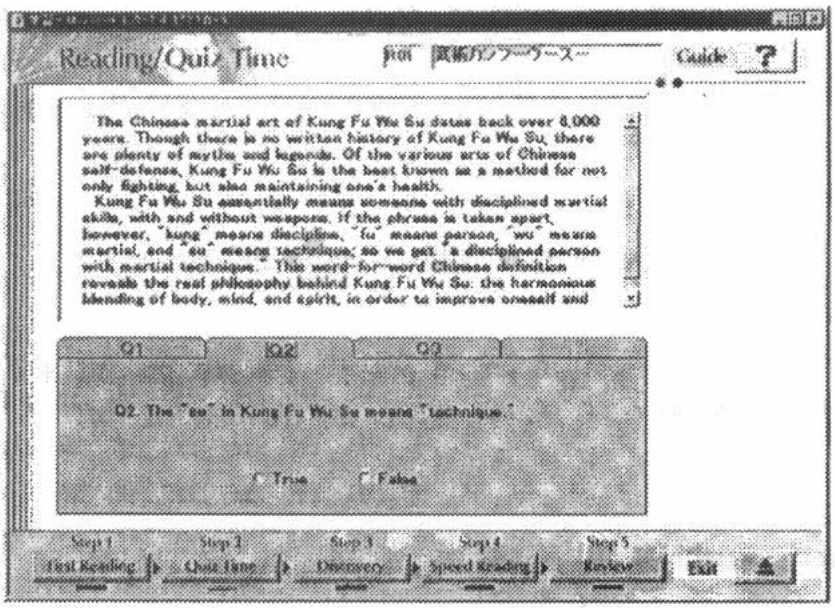
4）システム転換の興味深い例は介護保険の導入に見ることができる。ここでは保険実施に必要な基盤整備の大半が措置時代の諸組織や医療機関を利用して進められたため、政策理念に反して、既存の医療機関や組織を非効率な体質のまま温存させる結果となっている。

10.「情報管理」

私たちのグループでは、ＩＴ(情報技術)によるコミュニケーションの変化について、携帯情報端末の未来型といわれているリスト型（時計のように腕につけ携帯する）のツールを使ったコミュニケーション実験、インターネットで繰り広げられるChat（チャット）に関する実態調査、ＩＴコミュニティの未来像に関する研究、コミュニケーションを主たる目的としたグループウェアの研究、の四つの実験・研究を行いました。その結果、情報を管理してもコミュニケーションの量は変わらないか、それ以上に増大する、つまり情報を管理し共有化することにより、人間はより密接なコミュニケーションをとるということが明らかになりました。

11.「コミュニケーションと外国語学習」

私たちのグループでは、ALC社のNet Academyという教材を導入し、外国語自主学習教材に関する研究を行いました。この教材の特徴は、学内ネットワークに接続されているパソコンなら24時間いつでも学習でき、学習レベルに応じてプログラムを決め、読解やヒアリングのスピードもレベルに合わせて調整することができるという点にあります。ALC社では、その後も医学部生専用プログラム、理工学系専用プログラム、自宅学習プログラムなどを開発中で、私たちも継続して新しいプログラムの導入環境を整備していく予定です。



Net Academyの画面

参考文献

『新しい関係性を求めて－コミュニケーションの諸相－No.1』（平成11年3月、386項）
『新しい関係性を求めて－コミュニケーションの諸相－No.2』（平成12年3月、436項）
『新しい関係性を求めて－コミュニケーションの諸相－No.3』（平成13年3月、466項）

特集 全学合同研究プロジェクト

開放系／半開放系のごみ処理と地域資源循環型社会の構築に関する研究

農学部　藤田　晋輔

はじめに

20世紀は物質文明を享受し、飛躍した世紀であったが、その裏に現れた大きな課題は大量生産、大量消費、そして大量廃棄による地球環境汚染、食糧危機、人間関係の疲弊などの危機があげられよう。

どのような地域、場所でも大量消費、大量廃棄に伴う課題が山積していることは周知のとおりである。このプロジェクトの表題は非常に難しい表現をしているが、簡単に表現すると、「発生したごみ処理をどのようにするか、すなわち、他人が他所で処理してくれるか、自分が処理するか」であり、そして「出したごみをどのようにして資源化、もしくは有価物とするか」をテーマとしたものである。

このプロジェクトはこの相異なる２つの地域をとりあげることにした。すなわち、開放系の地域として大学を、半開放系の地域として屋久島を対象とした。大学という地域は学内で消費し、廃棄物となったものをほとんど学内処理することなく、所在する地域内他所に排出していることから「開放系のごみ処理システム」と定義した。一方、鹿児島県に多くある離島は、これまで特徴的な物質とエネルギーの循環が行われてきたが、近年廃棄物処理の点からみると、一部は島外に搬出するものの、大部分は何らかの処理を島内で自ら行わなければならない。このことから離島は「半開放系のごみ処理システム」と定義した。

さて、教育と知的情報生産の場であるにもかかわらず、大学は結果として大量の廃棄物（生ごみ、紙、使用済み薬品、各種の研究機材、排泄物、そして廃棄文房具など）を発生させ、地域にその処理依存している。しかし、世界自然遺産に指定された屋久島は農林水産などの島の生産体系と生活環境の関係を常に考慮し、加えて自然との共生を進めながら、ごみ処理を行わなければならない。ごみ処理が不可能になってきた今、これらを解決するためには再利用資源化、エネルギー化を進めるなか、多くの技術的問題だけでなく、住民意識の問題をも視野にいれなければならない。

このプロジェクトではごみの科学的な処理と資源化（有価物化を視野にいれた活用）の方策を考え、それぞれの地域で如何に資源循環型の社会を形成できるかを理論的にも、実際的にも研究調査することとした。この中で、ごみ処理の最終的な産物としてエネルギー（ガス、発電など）や物質（有機肥料、建築素材など）の活用化など、ごみの資源化・循環再生型利用を構築し、最終的にはごみの発生過程＝人間の生産活動／消費活動のシステムの中でごみ問題を体系的に捉え、環境保全型の生活活動や自然環境に調和した生活のあり方まで探ろうとするもので、併せて起業化も視野に入れている。

ここでは、開放系である大学と半開放系である屋久島（それぞれ「エコキャンパス計画班」、「屋久島エコタウン構想班」と略称している）において現在までに行ったごみ問題に関する研究成果を紹介した。知的集合体である大学に居住している教職員、学生の全構成員にごみ問題に関する認識を新たにして欲しい。そして、なかんずく、環境と共生し、しかも有機的な活動の場として、地域、世界に見本として誇れるキャンパスとなることを願うものである。以下に、これまでの２年にわたって得られた２つの環境プロジェクトの成果を簡単に紹介したい。

１．環境保全型キャンパスをめざす鹿児島大学エコキャンパス計画

「エネルギーや物質を大学内で出来る限り循環再生する」とする解決法は、途方もなく大量のエネルギーの浪費が前提であり、幻想的なものとなる。我々は出来るところから始めなければならない。このことから、環境保全型キャンパスをめざす３本のスローガン

１）地球環境の保全を目指す。

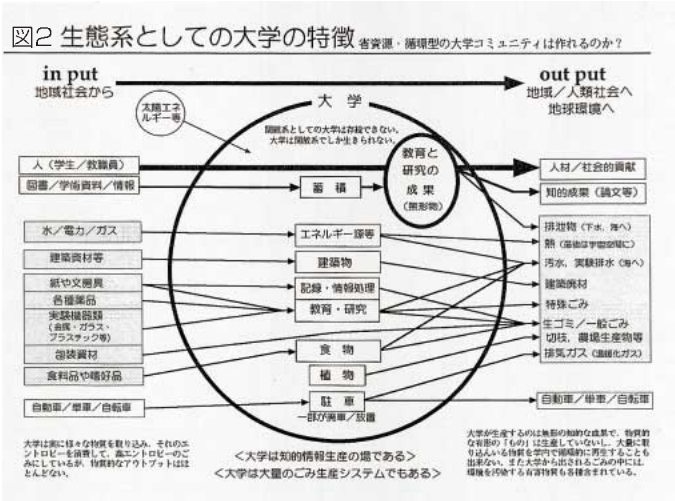
２）教育研究に相応しい環境形成に努める。

３）21世紀の地球環境を守る市民意識を育てる。

を掲げている。大学の中でこのようなスローガンをかかげること自体「お笑いもの」であるかもしれないが、残念ながら、実態は目にあまるものがあるからである。一例をあげると図1に示すような光景が見られる。皆さんはこれを見てどのように感じられますか？美しいと思われますか？　眉をひそめたいですか？　これがわが大学の実態です。皆で考える必要があるのでは？

図1　大学祭あとのごみの山

生態系的に考えたときの大学の特徴を図2に示した。この図に見られるように、大学は知的情報生産の場であるが、その大部分は無形の知的な成果（論



文、人材、社会的地域貢献など）であり、物質的な有形の「物」は生産していない。地域から取り込んだ物質を学内で循環的に再生することもできていない（しかし、今後は物質的な有形の「物」を生産しなければならない状況が近づいている）。現状において大学から発生する大量のごみ生産の場である。これらには環境を汚染する可能性のある有害物質も含まれ、これらを最小にするには、学内でなるべく共有し、廃棄物の発生を小さくする必要がある。例えば薬品についてみれば、これの管理のための機関（例えば試薬センター）を設置し、ＩＴ技術を駆使することにより、出来るだけ薬品を共有し、残薬品を廃棄物として出さない努力が必要であろう。

生ごみ問題は生活協同組合食堂の協力を得て、現在コンポスト化の実験中であり、結果がでるまであとしばらく時間の猶予が必要であるが、出口問題を含めて更なる検討が必要である。生ごみのコンポスト化は多くの課題を抱えそうである。

次の課題は、過去ほとんど問題視されていなかった焼却問題である。少なくとも郡元キャンパスの各学部は学部内のどこかに大きな穴を掘り、そこで焼却することが長くつづいてきた。定期的に焼却灰を除去していたが、7～8年前に埋められてしまい、現在どこで焼却していたか不明の状態である。しかし、ダイオキシン問題がクローズアップしているの

で、「これについても聖域ではない」との一致した見解となった。このことから、平成12年度にはこのプロジェクトの中で調査費を計上し、調査することにした。当年度理学部内露天焼却場の深さ約3mまでの深さ方向の3ヶ所について調査した（図3）。環境庁（当時）の「ダイオキシンに係わる土壌調査測定マニュアル」にしたがって合計37種の項目についておこなった分析結果は現在印刷中であるが、安全基準をクリアしているものであった。このような結果が出て、正直なところ安堵している。平成13年度以降も順次調査を行い、安全なキャンパスとしたいものである。さらにごみ資源の観点から、学内のごみ廃棄の方法、分別、そして収集場所の整備を進める必要がある。その場合に、景観やごみ捨てにおける人間の行動心理も含めながら調査検討を行う必要がある。

教官有志で構成している「エコキャンパス研究会」は出来るところからの実行を目指しているが、今年度はこれへの参加者を学生諸君にまで拡大し、大学を構成している全員の協力による美しいキャンパスとなり、しかも地域完結型の資源循環社会システムが創生できることを夢見ている。唯の夢に終わらないように願うものである。

図3　ダイオキシン測定のための露天焼却場跡

2. 屋久島エコタウン構想

―地域資源循環型社会システムの構築をめざして―

図4　屋久島の3つの顔

屋久島エコプロジェクトを覗いてみよう。屋久島は命（いのち）の島と称され、ここを訪れる人々に深い感動を与えている（図4）。平成5年に日本で初めての世界自然遺産の島として指定された。このことから従前に増して、屋久島における自然、歴史、文化の源泉である国有林を中心とした世界遺産の保全管理と地域振興との具体的な環境共生の策定が求められている。しかし、屋久島には14,000人の人々の生活があり、環境の一言ですべてを拘束できない。すなわち、上手に環境と共生するには、生活を初めとする多くの産業から発生する各種の廃棄物をエネルギー、有価物へと有効活用するために、人間を含めた生態系と工学的発想を付加しなければならない。

屋久島を舞台とし、国連大学をはじめとする多くの機関が「ゼロエミッションモデルによる小さな地球」の実現を目指す研究を行っている。本プロジェクトでは鹿児島大学に在籍する参加者のもとに、大きな２課題を設定した。すなわち、①自然環境と共生する農、林、水産業等を組み合わせた新産業の創生、②地域に発生する農林水産業を中心とする産業廃棄物および生活廃棄物を活用した「廃棄物ゼロをめざした地域資源循環型社会システム」を構築する

ことを目的として組まれたものである。すなわち、農業とアメニティ作物の関係、環境ラベリングとしての森林の位置など、農林水産業を新たな視点からとらえることにより産業おこしを行う。一方では産業および生活から発生する廃棄物も資源として捉え、屋久島にある多くの資源を永続的に活用するための環境共生に関与する産業基盤施設(雇用の創生)を構築し、自然と環境の共生をめざした新しい環境ビジネスを構築しようとするものである。

これまでの成果から、前者については新種海老の発見、植物の環境モニターとしての役割の可能性など多くの課題が徐々に明らかとなってきた。後者については、ゼロエミッション構想に基づいたこのプロジェクトを足がかりとした学産官連携による共同研究により、屋久町内で発生する有機系廃棄物のエネルギー変換技術、エネルギー（メタンガス）の創成、廃棄残査の資源（炭化物）化について、パイロットプラントの稼動がはじまっている（図５）。さらに地域でしか得られないヤクスギ等を活用した「環境共生住宅の建設」により、環境と共生できる建築法や医学的環境評価などが得られ始めている。

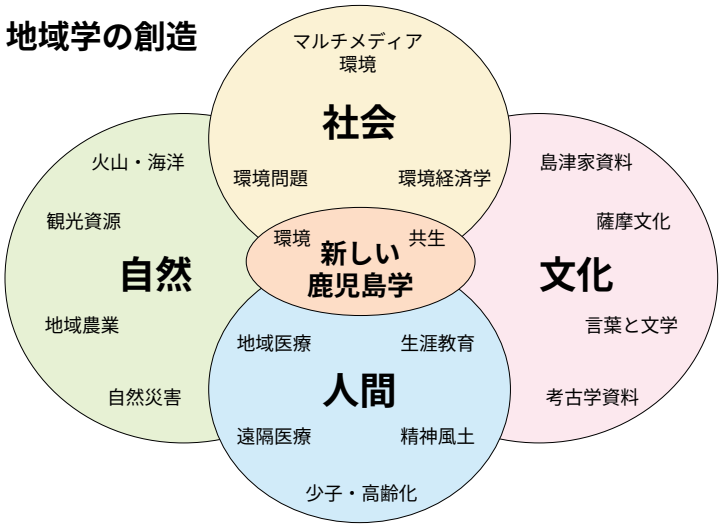
以上のように、本プロジェクトの特徴は開放、半開放系の対照的な環境の中で実施していることである。これの成果は地域の環境を考慮しながら、どのように行えば環境と共生が成立するか、大量に発生する廃棄物を知的でしかも物的資源へと変換できるかを提示したいと願っている。ここに遠山プランで提示されたベストサーティ精神が潜んでいるような気がする。大学内にゼロエミッション構想を導入したこのプロジェクトから生まれた大学のシーズが地域に還元され、そして国内、世界に情報発信できれば、鹿児島大学の存在意義が飛躍的に認められるかもしれない。

図5　鹿児島大学と自治体、企業と共に設置した有機物系廃棄物（生ゴミなど）からメタンガスを採るパイロットプラント（2001.3）

特集 全学合同研究プロジェクト

地域学の創造
―新しい鹿児島学―

法文学部　高津　　孝



いま、鹿児島大学では、鹿児島学という鹿児島を対象にした地域学をうち立てるために新しいプロジェクトに取り組んでいます。鹿児島学とは何かについて、その概要と研究成果の一部をご紹介しましょう。

日本における地方国立大学は、これまで、研究・教育という側面を重視し、人材育成という点から間接的に地域社会との関わりを持ってきましたが、一方、直接的に地域貢献に乗り出すことはあまりありませんでした。それは、アメリカの州立大学がコミュニティの一員として積極的に地域貢献を行ってきているのとは対照的であるといえましょう。すなわち、日本における地方国立大学は、知的資源の貯蔵庫としての役割を持ちながら、地域への還元という点では不十分な成果しか挙げてこなかったのです。これは、地域にとっても、地域に生きる大学にとっても不幸なことです。現在、地方国立大学に対しては、こうした点への取り組みの必要性が社会的に強く求められるようになってきています。鹿児島大学においては、こうした認識に立ち、平成12年度、田中弘允学長の発案に基づいて、大学を地域社会再構築の核とすべく、全学プロジェクト「地域学の創造　―新しい鹿児島学―　」を立ち挙げることになりました。現在、地域社会は、環境問題、福祉問題、財政問題など様々な地域問題に直面しています。大学はその性格上、目前の問題を即座に解決する能力には乏しいといえますが、その蓄積した知的資源と総合大学としての学際性という可能性、そして利害にとらわれないという立場を十分に活用するならば、中長期的な観点に立って、来るべき環境共生型社会としての地域社会の将来像を構築することは可能であると考えられます。また、大学に所属する研究者としてこうした現実の問題に向き合うことは、学問的飛躍のきっかけになるとも言えるのです。

鹿児島学プロジェクトに参加している研究者は、130名を越えます。これを、大きく4つのレベル《社会のレベル》《自然のレベル》《文化のレベル》《人間のレベル》に区分し、さらに全体を14のグループに分けて研究を進めております。

《社会のレベル》

- 鹿児島の環境問題
- 鹿児島の経済と環境
- 鹿児島のマルチメディア環境

《自然のレベル》

- 鹿児島の自然環境
- 鹿児島の地域農業と食品
- 鹿児島の都市景観と住生活

《文化のレベル》

- 近世薩摩の学術と玉里島津家資料
- 鹿児島の古代と考古学
- 鹿児島の言語と文学
- 鹿児島の国際交流

《人間のレベル》

- 鹿児島の地域医療
- 鹿児島の精神風土
- 鹿児島の生涯体育・スポーツ
- 鹿児島の教育

以下、今回のプロジェクト参加者の研究から幾つかを紹介しようと思います。

《社会のレベル》

図1

平成12年度に制定・改正

1）循環型社会基本法
2）（改正）廃棄物処理法
3）（改正）再生資源利用促進法（再生資源の利用促進に関わる法）
4）建設工事資材再資源化法
5）食品循環資源再利用促進法
6）グリーン購入法

平成12年4月より完全施行

容器包装リサイクル法

平成13年4月より施行

家電リサイクル法

21世紀の社会にとって、環境問題は最も重要な問題のひとつです。この環境問題の一つにゴミの問題があります。我々は、ゴミの問題を解決し、どのように循環型社会へと変化して行くのか。こうしたゴミと循環型社会という問題を取り扱った研究が、法文学部経済情報学科・坂田裕輔先生の「鹿児島経済における循環型社会の方向性」です。表1に見られるように、現在日本では循環型社会を目指して様々な法律が制定されてきています。ところが坂田先生によれば、これらの法律には二種類の循環型社会への方向性が混在していると指摘されます。すなわち、マテリアル・リサイクルといいわれる資源を何度も使う循環型社会とサーマル・リサイクルといわれる資源を有効に使いきる循環型社会です。そして、どちらを優先させるかについての合意がなければ現場の混乱を招くことになります。ここで坂田先生は、マテリアル・リサイクルを優先し、補完的政策としてサーマル・リサイクルの活用を提言します。ところで、社会を循環型社会に転換することは、生活を昔に戻すことなのでしょうか。確かに江戸時代は非常に循環型社会としてふさわしいシステムが出来上がっていた社会ですが、いまさら我々の生活を江戸時代に戻すことは現実的ではありません。しかしながら、現在に残る、それぞれの地域の実情に根ざした伝統的社会の知恵や工夫は貴重な我々の財産であり、鹿児島の地域からこのような行動様式を再発見していくことは重要です。また、意識的に循環型社会の価値観を持ちながら、新しい活動を行ってゆく事例も多く、地域に生きる研究者としてそれらの事例を掘り起こし分析し、紹介する必要を指摘しています。地域の特性に根ざした循環型社会を構築するに際して、鹿児島県については、鹿児島市とその他の自治体の規模の違いが問題になります。それぞれのライフ・スタイルに大きな差が無いのに、人口密度の違いによりゴミ処理のあり方に大きな違いが出てくるのです。今後、こうした様々な地域特性に着目しながら、地域に根ざした循環型社会のあり方をモデル化し、鹿児島のより良き将来に向けて研究を進めていただけると考えます。

《自然のレベル》

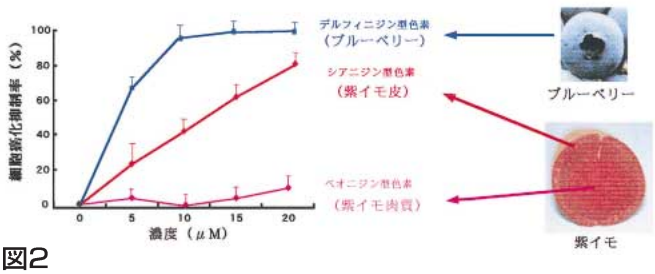


図2

癌の克服は21世紀人類に課された大きな課題です。そして、鹿児島地域は、この癌の克服について大きな貢献が可能なのです。農学部生物資源化学科・侯徳興先生の「鹿児島地域における癌化抑制機能の食材の開発」は、大変ユニークな研究です。疫学的調査によると食物の中には発癌抑制効果を示すものが多く存在すると示唆されています。したがって、「食と癌予防」は現代社会にとって極めて重要な問題となるのです。ところが、自然食材による癌の予防は長い年月がかかり、そのため、食材による癌予防の有効な検証方法の開発とその効果の分子機構の究明が極めて重要になってくるのです。侯徳興先生は、鹿児島が地域に根付いた「経験的な健康食材」を豊富に有することに着目し、これらの食材を細胞癌化抑制機能という観点から検証し、食材の癌予防機能を活用した新商品開発などの産業振興に結びつけようと努力されています。

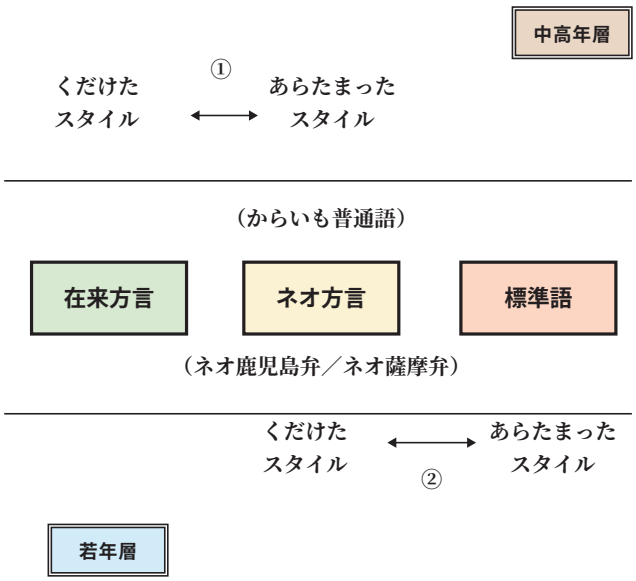
今回取り上げた食材は、サツマイモ（紫イモ、高系14号イモ、シモンイモ、コガネセンガンイモ）、サツマイモ発泡酒（サツマパープル、サツマブラック、サツマゴールド）、サツマイモジュース（高系14号イモ、シモンイモ）、ブルーベリーで、次のような結果が得られています。図2参照。1、ブルーベリー、サツマイモ（紫イモ、高系14号イモ、シモンイモ）およびその食品加工製品（サツマイモ発泡酒、サツマイモジュース）には、発癌プロモーターＴＰＡによるマウス皮膚細胞癌化に強い抑制能を示した。2、紫色を呈する食材の細胞癌化抑制能はそのアントシアニンの化学構造と深く関係し、デルフィニジン型（ブルーベリー）・シアニジン型アントシアニン（紫イモ）を多く含む食材は細胞癌化抑制能が強い。3、食品加工製品（サツマイモ発泡酒、サツマイモジュース）も同様の細胞癌化抑制能を示し、イモアントシアニンは加工過程においても機能を失わない。今後、これらの食材の機能性を生かした製品の開発が望まれます。

《文化のレベル》

鹿児島弁は全国の方言の中でも特に著名な方言です。しかし、今の若者たちは現実にどういう方言を話しているのでしょうか。また、鹿児島方言はどう変化していくのでしょうか。こうした、現在われわれの話している言葉の問題を研究したのが、法文学部人文学科・太田一郎先生の「鹿児島のネオ方言」です。一般的に「方言」という場合、日常の生活語として老年層話者によって話される言葉を指しますが、ここでいう「ネオ方言」とは、標準語の影響を受けて変容した若年層の日常語を指します。方言と標準語の混じり合ったものとしては、鹿児島には「からいも普通語」というものがあります。「からいも普通語」とは、鹿児島方言と全国共通語のまじったもの、とくにアクセント・イントネーションに鹿児島的なものが出たもの、と定義されます。そして、日常的には在来方言をあらたまった場所では「からいも普通語」をという使い分けがあります。ところが、現代の若年層の場合は、「からいも普通語」がくだけた場面で使用されているのです。すなわち、図3に見られるように、鹿児島という言語共同体には3つの言語コードが存在し、世代によって使用の仕方に違いがあるのです。そして、若年層の用いる「からいも普通語」は、次の2点で従来の「からいも普通語」と異なっているので、むしろ「鹿児島ネオ方言」（ネオ鹿児島弁・ネオ薩摩弁）と呼ぶのがよいと提案しています。1、東京の口語的要素がかなり混じっている。2、発話の態度表明部分を受け持つ文末詞（ケ、ガ、ヨなど）の意味体系が再構築され、新しい文末イントネーションも存在している。

若年層のネオ方言は、アクセントと一部の在来方言要素（文末詞など）を除き、そのほとんどが標準的要素に置き換えられてしまったといえるのですが、方言はやがて消滅してしまうのでしょうか。太田先生は、それを否定しています。すなわち、現在の鹿児島の若者言葉は、標準語の影響をうけているとは言っても、アクセントや態度表明の文末表現などに体系性を保持しており、語彙や文法形式のように表面的な現象から伺えるほど標準語的ではない、というのです。

図3　読者世代と言語コードの使い分け



《人間のレベル》

いま、初等中等の教育現場は様々な問題を抱え苦悩しています。より良き方向への糸口が模索されているのです。教育学部社会科教育・梅野正信先生、法文学部法政策学科・采女博文先生の「「議を迎え入れる」ために ―社会と地域に開かれた学校システムの論理と原理― 」は、教育現場に生起する諸問題に直面する教師にむけての教育プログラムの提案となっています。「議をいうな」とは、鹿児島につたわる伝統的「物言い」ですが、私たちは、すでに、与えられた規制を無前提的に唯々諾々とする社会には住んでいません。私たちの社会は、「いつでも」「誰でも」「どこからでも」、みずから関わる問題に「議」をとなえることの許される社会であるのです。「いじめ」「不登校」「校内暴力」「学級崩壊」など、学校で起こる深刻な問題には、事態悪化の過程で、必ずと言ってよいほどに、児童・生徒、保護者と先生方との間に、コミュニケーションギャップが見受けられます。今日の学校と教師とにとって重視されなければならない資質とは、学校で生起する問題に「正邪」の判定をくだす能力だけでなく、乱立する「議」を迎え入れて調停する力量、交渉能力にこそ、あるように思われます。

梅野正信・采女博文両先生は、こうした認識に立って、「乱立する議」の時代にあって、鹿児島の教師がリーダーシップをとり、「議を迎え入れ」「議を調停する」ことのできる能力と資質を育成するため、3つのトレーニングプログラムを提案されています。1、「いじめ」裁判の資料を活用した研修・授業プログラム、2、「説明」「合意」の可能な学校内規制を確立する研修・授業プログラム、3、「法的合理性」と「心の痛み」を共有する教育的コミュニケーション育成のための研修・授業プログラム、です。「正しい結論」を強制するだけでは説得力を持ち得ない時代に私たちは生きており、共通の理性的コミュニケーションが、なにより鹿児島の学校と教師によって先進的に構築されてゆくことが、この研究の目的になっています。

各研究の説明は、「鹿児島学のプロフィール」「鹿児島学のプロフィール2」掲載の研究成果報告に基づき、事務局がまとめたものです。

（鹿児島学事務局・法文学部・高津）

特集 全学合同研究プロジェクト

離島の豊かな発展のための学際的研究
―離島学の構築―

法文学部　皆村　武一

はじめに

鹿児島県の昭和30年の離島人口は32万1970人であったが、平成9年には19万7720人に38.6%減少した。県人口は、同期間中に204万4千人から179万3千人へと12.3%の減少であった。鹿児島県の有人島の数は28で、長崎県、沖縄県に次いで、全国第3位であるが、離島人口は、昭和30年、平成9年ともに、全国第１位である。

戦後、国土計画の一環として、離島のハンデキャップを解消して、本土との経済的格差是正、国土の均衡発展を図るために、離島振興法、奄美群島振興開発特別措置法が制定され、社会資本、産業基盤の整備がなされ、経済的豊かさはある程度実現した。にもかかわらず、あるいは反面においては、多くの離島は、人間が居住し、生活を営む上で相対的な限界地域へと後退し、そのために、基幹的産業の衰退、新規産業の創出や誘致の困難性による人口流出、域外への依存度の増大とともに、文化や伝統の衰退、環境の破壊も進展した。

島嶼は、一般的に資源過少（土地、資本、労働力、資源）であり、島内の生産要素を利用して必要なものをすべて生産すること（自給自足）はほとんど不可能であるし、また賢明な方法でもない。他の島や地域と分業関係を形成し、相互に交換しあうのがお互いにとって経済的には利益があることである。しかしながら、経済的利益の追求は他のものを犠牲にすることもしばしばあるし、また、経済的利益のみが豊かさを保証するものでもない。経済的豊かさとともに、豊かな文化、自然、医療、福祉が保証されてはじめて、真の豊かさを保証することができるのである。

鹿児島大学合同プロジェクト「離島の豊かな発展のための学際的研究―離島学の構築―」は、経済的発展のみならず、社会、文化、自然、医療、福祉等の学際的・総合的観点から本土に比べてハンディキャップを有する離島の豊かな発展＝調和ある発展に資することを目指したものである。

１．離島の二面的性格

総じて、島嶼は、人間が生活していく上で必要な物資的、文化的条件を十分に備えておらず、不足を補うために、外部に依存せざるを得ない側面を持つと同時に、常時、人間の最低限の生存を保証するために、自給自足体制を整えておかなければならないという側面を有している。そのことから、島嶼社会は、外部依存的であると同時に、自給自足的であるという二面性（開放性と閉鎖性）を合わせもっている。航海術や地理上の知識が乏しかった時代にあっても、必要な生活物資や情報を入手するために、危険を冒して未知の海を遠くまで航海した。他方においては、狭い閉ざされた社会なるがゆえに、人々は血縁または地縁で結びついて村社会をつくり、見知らぬものを排除する傾向が強い。村社会という組織が生活、生産、祝祭の一つの単位をなしていた。それゆえに、村社会から構成される島嶼では政治、経済、文化、祝祭等の要素が未分化の状態にあり、生産においても社会的分業が未発達で、生産効率は低い状態にある。K・ポランニーの言葉を借りれば、「経済は社会に埋め込まれ」ており、生産活動は純経済的原理（最小の費用で最大の利潤をあげるとか、合理性や効率性を追求するということ）に基づいて

行われているのではないということである。やがて、蒸気船による航海が発達し、周囲の島々、あるいは遠方の地域とも容易に往来できるようになった。そのために、自分の島では比較的有利な生産物の生産に専念して、それと交換に生産困難なものは他の島から入手した方が利益があることを知るようになった。これはリカードの比較生産費説と呼ばれるものである。

分業に基づく貿易の進展（競争）の結果、島々では、以前は生産していたものが生産（栽培）されなくなって、消滅してしまった。新しい文化や宗教も入ってきた。島の伝統的な社会構造や文化、宗教等と混合・融合し、新たな社会、経済、文化が形成されたのである。

島嶼といっても、面積、地形・地質、人口密度、資源の賦財状態、大都市からの距離、緯度・軽度などの違いがあり千差万別である。だが、共通して言えることは、島嶼は、各々海や大河で隔てられているために、人やモノやカネ、情報などの量が少ないこと、その移動が比較的困難であり、他とは違ったものをつくりだすということである。例えば、ダーウィンの『種の起源』で有名なガラパゴス島や奄美諸島の特異で希少な動植物種（鹿児島大学理学部地球環境科学科多様性生物学講座堀田満他『南西諸島における自然環境の保全と人間活動』平成12年度鹿児島大学合同プロジェクト「離島の豊かな発展のための学際的研究―離島学の構築―」自然班報告書、2001年3月）や文化をあげることができる。また、反面においては、狭小性、隔海性、資源過少性からくる自然災害や飢餓、疫病など外部からの影響によって、短期的に急激な変化をきたすことも避けられないということである。その例として、スペインやポルトガルによる文化や財宝の破壊と略奪、および彼等が持ち込んだ病原菌による西インド諸島の原住民人口の激減等、の例をあげることができるし、外来種の動植物が島の生態系を破壊してしまった例も多くある。また、かつては、炭鉱で栄えた長崎県の端島（軍艦島）、高島、池島、姫島が国のエネルギー政策の転換や資源の枯渇によって無人島化または人口激減に見舞われた例をあげることができる。鹿児島県十島村の臥蛇島も厳しい自然的社会的環境の中で、1970（昭和45）年7月に無人島となったが、その後の変容（草木に覆われていた山が禿げ山になり、赤茶色の岩肌をむき出し荒廃している。22頁の写真参照）は著しいものがある。以上の例にみるように、島嶼は外部からの影響に対して非常に脆弱（ぜいじゃく、傷つきやすい　vulnerable）である。持続的または循環的な社会を構築していくためには、島の許容限度を知ることが重要であり、島が自立性を高めていくためには、島の資源や技術を活用した産業（外部の企業でも結構）を育成するとともに、島民の主体性と住民自治の確立が必要である。

2. 離島苦の解消のための離島医療体制の確立

人間が安心して健康で暮らしていくためには、医療体制が完備していることが必要である。われわれが、島に旅行または居住する際に、最も不安に思うことは、良い医療技術または医療施設があるだろうかということである。離島はいろいろな事情から、一般的に、医療技術や医療施設には恵まれていない。本土から離島に転勤する教職員、県庁職員、警察官、サラリーマンは、ほとんどが単身赴任である。その最大の理由は、子供の教育と家族の医療の心配である。また、毎年、多くの島民が病気の治療や検査のために、多大な費用と時間をかけて、島から本土へ渡航する。経済的・心理的な負担は非常に大きいものがある。

鹿児島県保健衛生課の『鹿児島県保健医療計画』

（平成9年10月）によれば、「本県は、多くの離島・へき地を抱え、これらの地域は、全般的に医療供給基地の整備が立ち遅れており、これに交通基盤の立ち遅れも手伝って、医療機関の利用が困難な地域が存在しており、無医地区37地区、無歯科医地区50地区となっている。また、住民の居住する28の離島のうち18島が無医島であり、無医村も２村存在している。無医地区等については、へき地中核病院による内科を主体とした循環医療を実施しており、特に不足している眼科、耳鼻咽喉科、皮膚科及び歯科については、県医師会、県歯科医師会及び鹿児島大学の協力を得て、離島を中心に巡回診療を実施してきた」と述べている。

多くの離島を有する鹿児島県に立地する鹿児島大学は、地域に開かれた大学として地域問題に積極的に取り組んできたという実績（例えば、奄美の風土病といわれたフィラリアの根絶等）をもっており、今後ますますその姿勢を強化しつつある。その中でも、離島医療システムの確立は最も必要性を迫られている問題である。平成13年４月に医学部に離島医療学講座が開設され、LANによる無医島の加計呂麻島との遠隔地医療システムの確立等、今後の離島医療体制の一層の改善と離島住民の医療費支出の節減が期待されているところである。というのは、大がかりな手術や救急医療はもちろんのこと、眼科、人間ドックの治療や受診のために、都市部まで来なければならない。医療費のほかに、旅費・宿泊費や仕事の休暇を考えると、離島の人々は本土の人々に比べて、医療費以外のより多くの経済的・精神的な不安を強いられているからである。健康で安心して豊かな暮らしをしていくために、ヒューマン・ベイシック・ニーズ（人間の生存のために基本的に必要とされる条件）の一つである離島医療システムの整備は喜ばしいことである。

無人島になった臥蛇島の赤茶けた山肌

1970年７月、無人島になった臥蛇島は、放たれた鹿や山羊に草木が食い荒らされ、大雨や台風で土が流され、赤茶けた山肌をさらしている。31年ぶりに島を訪れた元島民は、「島は変った」と語っていた。2001年６月30日、皆村写す。

むすび

離島に関する調査研究は、枚挙にいとまがないほどである。県内の離島に関する調査研究の主なものをいくつかあげてみると、名越左源太著『南島雑話』、赤堀廉蔵著『島嶼見聞録』、笹森儀助著『南島探検』、柳田国男著『海上の道』、九学会連合『奄美―自然・文化・社会―』、平野郁夫編『薩南諸島の総合的研究』、鳥越皓之著『トカラ列島社会の研究』、などである。それぞれの調査研究は、離島に関する歴史、社会、産業、生活、民俗、風俗、文化、自然等を知るうえでいずれも貴重なものである。しかしながら、これらの研究業績を縦横に駆使した総合的、一般的な「離島学」を確立するまでには至っていない。堀田満氏がいみじくも述べているように、「『離島学』という学問領域が自立的に存在しうるのかどうかは、いささか疑問もある。島嶼におけるヒトの生活は、それなりに特殊性をもっているし、島嶼の自然はまたそれなりに独自性をもっているが、それらはあまりにも島ごとに異なり、島ごとに異質である。だから『離島学』はいつも『○○島の○○学的研究』に特殊化し、ただの記述に陥る危険性を有している。（中略）現地調査による綿密なデータの蓄積と、異質なデータの相互比較を通しての、個別性と一般性の抽出と諸現象の関連に基づく体系化を進めても、それが新しい『離島学』の創立まで展開していくには巨大な知的活動が必要とされる」（堀田他前掲書）のである。幸いに、鹿児島大学は自然科学系、社会科学系、人文科学系の８学部を有する総合大学であり、全学共同プロジェクトの一つとしての離島を多方面にわたって調査研究し、その成果を総合化・一般化してくという困難な作業を通じて「離島学」の構築に取り組んでいるところである。まちろん、本プロジェクトは、地域に開かれた大学、地域に貢献する大学を目指した鹿児島大学の全学共同プロジェクト（学長裁量経費）の一つである。その成果は、離島の豊かな発展のために還元されるであろう。

なお、本プロジェクトは、佐伯武頼教授（前医学部長）・永田行博教授（医学部長）を代表者とする、6部門、50人から構成されている。

随　想

理学部　西尾　正則

宇宙に関する話をさせていただく機会に、よく“宇宙人はいますか”という質問をされます。私の答えは“いるかもしれないし、いないかも”です。この答えは、質問した方にとってはきわめて不満足な答えのようです。○なのか×なのかはっきりしてください、ということでしょうか。大学に入ってきた直後の学生に宇宙科学入門という講義を担当しています。宇宙のことを題材にしながら、答えのない（あるいは、答えがわかっていない）ものを考えてみる、ということをテーマに講義を進めています。講義の後にアンケートをとってみると、おおむね話題に興味を持ってくれているようですが、稀に、話の内容に混乱したり、漠然とした不安を感じてしまう、あるいはもう少し直接的に講義が不親切であるという旨の回答があります。新しく大学に入学してきた学生たちはどうも答えの見えない講義というのに慣れていないようです。受験という競争は、勉学の動機付けとしてきわめて有効な方法であり一概に否定されるものではありませんが、全てのものごとに答えが存在すると思い込ませてしまうという危険性があるように思われます。答えがないことを知ることは、価値観の多様性を認めることにもつながります。就職難の昨今、大学での教育は社会に出て実践的に役立つものにしましょうということのようですが、答えがないことがたくさんあるということを知ることでも大学での実践的な教育のひとつではないかと思っております。いかがでしょうか。

話は変わりますが、私は理学部物理科学科に所属し、ここには宇宙コースという宇宙のことを学ぶ教育コースがあります。天文学や宇宙工学は国威発揚のための学問といわれ、宇宙のこと、天文のことを勉強して就職はどうなるのだろうと高校の進路指導の先生から不安視されることがあります。そのあたりのことを少しでも解消するため、カリキュラムに電子工学や情報処理に関する教科を増やしたりしています。また、学生もあれこれ資格試験に挑戦したり、企業研修を受けたりと、将来に向けた活動をしています。しかし、学生たちは、多分に、宇宙に対する魅力・あこがれをキーワードとして科学技術に興味を持ち、勉学意欲を維持してくれているところがあります。多少暴言ではありますが、大学で学んだ知識の多くはそのままでは企業での即戦力としては役立たないと思います。企業に就職してから吸収することの方がはるかに多いでしょう。大学で学ぶいくらかの知識に加え、未知のことを学ぶということを面白いと感じ、自分で本を読んだり資料を調べたりするという姿勢を大学生活の間に伸ばしてくれれば、長い目で見て私たちの教育は成功した、といえるのだと思っています。

保　健

心　身　症

保健管理センター　森岡　洋史

心身症とは、身体症状を主とするが、その診断や治療に、心理的因子についての配慮が特に重要な意味をもつ病態と定義されています。つまり、心身症は心理的ストレスに関連して起こる身体疾患の総称であって、心身症という特定の病気があるわけではないのです。ですから、病名のつけかたも、胃潰瘍（心身症）というように記載するのが普通です。

さて、心身症の種類はというと、内科や外科、産婦人科から、小児科、耳鼻科、眼科、皮膚科にいたるまであらゆる科にわたってみられます。代表的なものとして、本態性高血圧症、気管支喘息、十二指腸潰瘍、糖尿病、インポテンツ、片頭痛、メニエール症候群、アトピー性皮膚炎、円形脱毛症などがあります。これらがストレスと関係があることは皆さんもなるほどと思われるかもしれませんが、中には、しゃっくりや歯ぎしり、おもしろいところでは、疣贅（いぼ）なども心身症としてあつかわれることがあります。では、同じようなストレスが加わったにもかかわらず、なぜ人によって病的状態となる臓器が異なるのでしょう。これは、器官選択とよばれ、与えられた環境に適応するために示す行動パターンは人によって違うということから説明されます。それには、大きく２つのタイプが知られています。タイプＡは、野心と競争心に富み、時間にうるさく、仕事に熱中し、物事を早く処理し、自分を常にかりたてて生きているような人を指し、このような人は、高血圧症や狭心症など、いわゆる循環器系の心身症になりやすい人たちです。一方、タイプＢは、タイプＡとは反対で、ストレスに直面すると自分の殻の中にこもることによって自己防衛しようとする、つまり弱気で消極的な人を指すのですが、その反面、時には怒りや悲しみの感情を表現する場合のあることが特徴で、このような人は、十二指腸潰瘍や過敏性大腸炎など、消化器系の心身症になりやすい人たちです。なお、これらとは別に、タイプＣという行動パターンもあって、それは、前述のタイプＢに似ているのですが、怒りや悲しみの感情を抑圧してほとんど表に出さない人で、このような人たちは、癌になり易いとされています。

つぎに、心身症全体に共通する心理的特徴を表すために提唱された概念がありますので、一言述べておきます。それは、失感情症とよばれ、想像力が貧困で、情動を感じる能力に乏しく、さらにその情動を表現することのできないことを指すことばです。これは難しくいうと、知性の座である大脳新皮質と感情の座である視床下部や大脳辺縁系との連絡が先天的に機能不全をきたしている状態と説明され、そのためストレスに気づかず、結果として仕事などの環境に過剰に適応してしまい、ついには心身症を発症してしまうというのです。

心身症の治療については、身体疾患の治療、例えば胃潰瘍なら潰瘍治療薬の投与を行うのはもちろんですが、それに加えて抗不安薬や抗うつ薬の投与が大切になります。診察場面では、家族や職場などのストレスに関する話題に充分な時間をとり、必要なら、患者さんの性格面などを考慮して、自律訓練法や行動療法、交流分析療法などといった治療技法を用います。失感情症傾向のある人には、自分でできることとして物語などを味わいながら読むということも薦められるでしょう。

ともあれ心身症は、内科、外科などといった一般診療科での身体治療だけでは治療成績が上がらないことが多いので、心理的、社会的また倫理的といった全体的な側面から人を診ていくことを治療の柱としている心療内科あるいは精神科で診てもらいたいものです。

学内だより

留学生日記

「留学に思うこと」

教育学部　胡　　俊

私は去年十月に中国から来た留学生の胡俊ですが、いま、M1として鹿児島大学教育学部に在籍しております。

日本に留学してしみじみ感じているのはまず言葉の問題だと思います。日本語がまだまずいから、講義の内容や研究発表の内容を充分理解できませんし、また、自分の考え方を正確に他人に伝えることもできません。よく手振り身振りで話していますが、充分コミュニケーションをとれないときがしばしばありました。

また、中国と日本は一衣帯水の隣国でありながら、文化や生活習慣は大きな違いがあります。一つだけ例を挙げますと日本人はあっさりした食事が好きで、あまり油を使いませんし、魚も野菜も生で食べます。しかし、中国人はほとんど全部油を使って、めったに生のものを食べません。

私たちは日本に留学して単に学術研究のためだけではなく、日本文化や日本人の生活様式を学び、国際人としての素養を身につけ、中日両国人民のより一層の交流や理解の推進に力を注がなければならないと思います。そのためには、大学という限られた小さな環境の中だけでなく、一般社会の中でも日本文化や日本人の生活様式などに適応しなければ留学生活を完うすることはできません。ですから、積極的に日本社会に取り込んで一般の日本人の方々とコミュニケーションをとるようにすればこそ、日本文化や日本人の生活様式などへの理解を深める道だと思います。また、日本人の考え方や価値観も身につけて帰国して、中国の人々に伝えひろげていきます。日本留学を通して、微力ながら一人の極普通の知日派だけではなく親日派として、多くの中国人に日本語や日本文化を教えることによって、中日両国の末永い友好交流に力を尽くしていきたいです。

「マレーシアと日本の大学生の違い」

理工学研究科　ヌライシャムスズラ・ロザイデイ

私は鹿児島大学に平成８年に入学しました。マレーシアのマラヤ大学で２年間日本語の研修を経て、鹿児島大学の一員として、５年前、私の日本での留学生活が始まりました。時が過ぎ、学部から大学院生になった今日まで、たくさんの掛け替えのない経験をしてきました。これらの経験がいつか役に立つ日が訪れるだろうと常に思っています。

両国の大学生を経験してきた私は、ここで、日本の大学生と母国マレーシアの大学生を比較してみたいと思います。

まず、私生活の面では、アルバイトという違いがあります。マレーシアの大学生は、アルバイトをすることが法律上禁じられています。これは、大学生として真剣にそれぞれの勉強や研究に集中して欲しいからです。もちろん、私生活の面で苦しい大学生は当然いますが、政府を始め民間の協力を得て、そこで大学側はありとあらゆる方法で、学生への資金援助の充実化をはかってきました。それだけではなく、大学側はほとんどの学生をキャンパス内の寮に住まわせ、少しでもその負担を減らそうとしています。

それに対して、日本ではアルバイトを禁ずることはありません。ほとんどの日本の大学生はアルバイトを持っています。授業料や生活費のためにアルバイトをする学生もいますが、遊ぶ金が欲しいからアルバイトをする学生の方が多いと思います。つかれるせいか（授業がつまらないということも有り得る）授業中に寝てしまう学生を見ると、勉強と仕事（アルバイト）の両立はどんなに大変かということを実感します。

それだけではなく、アルバイトをすることで、当然学生が勉強についやすはずの時間がどんどん減り、宿題（レポート）や研究や学習などに与えられるはずの時間がどんどんなくなっていきます。これで勉強の質が低下してしまいます。

もう一つ気づいたことですが、日本では論議を構築できる学生がだんだん少なくなってきているように思います。私の観察では、レポートや論文（書物）などに関しては、すらすらと文書を書けて、自分の考えを相手に上手く伝えることができますが、口論（生の声）になると、どうも言葉が出てこなくて、相手に自分の考えを上手く表現しきれていない学生が多いような気がします。これは非常に残念に思います。

マレーシアの大学生の場合、大学に入る前に、２年間ぐらいの予備教育課程（ここでいう教養教育）の期間があって、そこで大学生としてのいしきを高める時期でもあります。論文を書く練習と同じく口論（ディベート）の練習もあります。ディベートの練習に関しては、大学に入学してから初めて練習するのではなく、小学校から高校までの重要な教育の一貫として見なされ、各学校が争って、よりいいディベーターを育てるよう努力をしています。

ここで私が言いたいのは、議論する力を身につけなければ、これから社会に出ても、あまり役に立てないのではないかということです。せっかく高い教育を身につけても、それを上手く社会に伝達できなければ、あまり意味がないように思います。

こういう比較をしたからといって、マレーシアの大学生は日本の大学生よりまじめだとかということを言いたいのではありません。もちろん、国も違えば、教育の成り立ちと社会が大学生から求めているものも違ってくると思いますが、わが大学の学生の参考になればと、この文書をつづってみました。

研究室紹介

「地域社会調査」を学び、楽しむ

水産学部　海洋社会科学講座　島　　秀典

私の所属する海洋社会科学講座は、水産学部において唯一の社会科学系の講座である。スタッフは６人であり、「海と魚と人との係わり」をモットーに、水産経済学、海洋政策学、水産法学、水産社会学などに関する幅広い海洋社会科学分野の教育研究活動を行っている。

本講座の教育活動の特徴の一つに「地域社会調査」がある。この授業科目は上記の研究分野ごとに調査内容を工夫し、毎年ユニークな社会調査を実施している。今年は私の担当であり、漁業地域の振興に対する関心を深めてもらうため、実際に学生を漁業地域に連れ出し、社会調査の体験学習を企画してみた。

今回の調査対象地域は愛媛県八幡浜市である。八幡浜市はトロール漁業（沖合底曳網漁業）の基地として発展してきた港町である。しかし、近年漁獲量の伸び悩みや魚価の低迷などから活気がなく、さらに高齢化の進行が著しく、「みなとまち八幡浜市」の再生が八幡浜市における最大の課題となっている。

そこで、八幡浜市の活性化を共通テーマとして、６月29日（金）～７月１日（日）にかけて地域社会調査を実施した。参加した学生は50名、調査方法はモニター調査。八幡浜市は鹿児島から一日行程の場所にあることから、29日と１日を移動日とし、調査は６月30日（土）に実施した。本調査に備えて学生と共に周到な準備を行い、不安と緊張の中、地域社会調査に臨んだ。果たして、調査の成果はどうであったろうか？

社会調査は午前９時から始まった。八幡浜市水産港湾課長から八幡浜市の概況説明を聞き、学生は個別テーマ毎６班（１班８名程度）に分かれ、午後３時まで八幡浜市内を歩き回りモニター調査を行った。その後グループ毎に調査結果の整理を行い、いよいよ調査結果の報告・意見交換会である。八幡浜市長、市議会議長、商工会議所会頭、漁業関係代表者、報道関係者など地元関係者30名余を前にして各班代表が結果報告、緊張の瞬間である。写真はそのときの様子である。学生と地元関係者との間で活発な意見交換が行われ、２時間という討論時間は瞬く間に過ぎて行った。高橋市長をはじめ、地元関係者からは本調査に対して高い評価を頂き、「八幡濱民報」などの地元新聞にも大々的に報道された。さらに、引き続いて開催された懇親会は大いに盛り上がり、地元関係者との交流は一層深まり、学生にとって有意義な社会調査になったと思っている。

このような社会調査は事故が最大の心配事であり、気が休まる時間はなかった。しかし、学生全員、事故もなく鹿児島に戻り、元気な笑顔を見ると疲れも吹っ飛んでしまった。

サークル紹介

バスケットボール部

来たれ！バスケ部へ

教育学部　須貝佳奈子

バスケットボール部は、現在男子15名、女子12名、マネージャー１名で活動しています。練習は、月・木・金が17時から、水が19時から、土が10時から第２体育館で、火は19時から第１体育館で行っています。試合は年に４回の遠征、県リーグなどがあります。女子は今年から県リーグに参加し、５部からのスタートですが、順調に勝って早く１部で戦えるよう、頑張っています。男子は既に１部リーグで勝敗を競い合っており、着実に実力をつけていっています。また、九州リーグでは男子３部、女子２部とまだまだ力は及びませんが、それぞれ２部、１部昇格を目標にし、日々練習に励んでいます。

バスケットに少しでも興味を持っているなら、ぜひバスケット部へ。苦しさ、きびしさの中から本物の喜びを味わってみませんか？

ヨット部

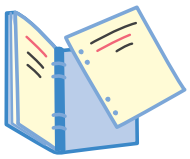
今のヨット部

工学部　筒井　　健

私たちヨット部はただ今、８月に福岡である九州インカレに向けてみんな気合い入りまくりでヨットやってます。今年は１年が結構入ってくれて部員もついに２ケタになり活気がでてきました。練習は毎週土日に平川の艇庫で合宿をやって、毎回の合宿は自炊していてかなり共同生活という感じで結構みんなたくましいです。（女の子は特に）。突然ですが、ヨットという競技は風を利用してやるので、今日練習して～と思って集まっても風が吹かないと無理です。とっても困ります。でもそんな時は、体育館を借りて他のスポーツをやったりどこかみんなで遊びにいったりして時間をつぶします。時には救助艇のモーターボートが釣り船になったりもします。といった活動を毎週やっているのですが、みんなに共通することといったら、やっぱりみんなヨットに魅せられてて、海が好きな人たちの集まりかなといったところです。

サークル紹介

法学研究会



私達の活動

法文学部　田中　耕洋

私達、法学研究会は主に３つの活動を行っております。まず第１に、学生無料法律相談があります。これは、一般市民の方々を対象として、日々持ち上がってくる法律問題、特に民法分野を中心とする法律問題に、私達の知識を少しでも役に立てたいという志のもと、開催させていただいております。

第２に、対外法律討論会に参加しています。これは、早稲田大学、慶応大学等の各大学と共に、ある法律問題について討論するというものです。討論会終了後、親睦会にて他大学との交流が持てるというのも大きな魅力です。

第３は、法律学習会です。これは、私達自信の法律知識をより深めるために設けています。下級生には授業対策も行っています。気軽に訪ねてきてください。

この他、コンパや合宿も随時行っています。大学生活で勉強も忘れたくない者、法律自身に興味がある者、大勢でわきあいあいと過ごす毎日です。のぞいてみてください。

表千家　茶道部

表千家茶道部

教育学部　豊饒　真子

私たち表千家茶道部は３年生７人、２年生４人、１年生８人の計19人で水、金曜日の５時半から大学会館和室４・５号室で活動しています。年間通して、５月の５月茶会、11月の学祭茶会、２月の卒業茶会の３つの茶会を催しており、今年の５月茶会ではたまり池横で野点を行いました。また練習では、５月茶会と学祭茶会に向けて立礼を練習したり、卒業茶会に向けて炉を練習します。季節に応じて夏は風炉も練習しています。月に１度表千家の先生がお見えになり、私達の練習を指導して下さっており、茶道をより深めていこうと学んでおります。練習以外にも、５月には新入生歓励会、夏休みには親睦を深めるために夏合宿を毎年行っており今年は屋久島でのキャンプを計画しています。その他にも各イベントごとに集まったりします。

新任教官紹介

職　　名　助教授
氏　　名　**橋本達也**（はしもと たつや）
（総合研究博物館）
学　　位　修士（文学）
生年月日　昭和44年12月４日
最終学歴　早稲田大学大学院文学研究科修士課程
前　　職　徳島大学助手総合科学部
担当科目　資料研究系
【抱負】
今春新設の総合研究博物館という開かれた大学を目指す組織の一員として、積極的な企画が出せるよう心がけたいと思っています。

職　　名　助教授
氏　　名　**永田邦和**（ながた くにかず）
（法文学部経済情報学科）
学　　位　修士（経済学）
生年月日　昭和47年１月29日
最終学歴　一橋大学大学院経済学研究科修士課程
前　　職　一橋大学助手大学院商学研究科
担当科目　金融論
【抱負】
研究と教育を通して地域や社会に貢献したいと思っています。微力ではありますが全力を尽くす所存です。

職　　名　教授
氏　　名　**宮下庸一**（みやした よういち）
（教育学部数学教育）
学　　位　理学博士
生年月日　昭和12年９月５日
最終学歴　北海道大学大学院理学研究科修士課程
前　　職　筑波大学教授
担当科目　線形代数学Ⅰ、代数学Ⅲ、代数学特論Ⅰ
【抱負】
北海道で育ち、鹿児島で最後の務めをすることになりました。健康を保って無事に勤めたいと願っています。

職　　名　講師
氏　　名　**石橋和明**（いしばし かずあき）
（医学部医学科）
学　　位　医学博士
生年月日　昭和30年１月９日
最終学歴　鹿児島大学医学部医学科
前　　職　鹿児島大学助手医学部附属病院
担当科目　内科学、消化器病（肝胆膵）
【抱負】
最近の５年間は、ウイルス性肝炎の臨床と非Ａ－Ｇ肝炎ウイルスのクローニングに取り組んでいます。よろしくお願いします。

職　　名　講師
氏　　名　**佐藤克明**（さとう かつあき）
（医学部医学科）
学　　位　博士（理学）
生年月日　昭和43年７月23日
最終学歴　北海道大学大学院理学研究科博士後期課程
前　　職　東京大学医科学研究所寄付研究部門教員（助手相当）
担当科目　医動物学・免疫学
【抱負】
私の専門は免疫学であります。鹿大では樹状細胞の機能制御に基づく細胞療法・遺伝子療法の開発を進めていきたいと思います。

職　　名　講師
氏　　名　**森豊隆志**（もり とよたか し）
（医学部医学科）
学　　位　博士（医学）
生年月日　昭和34年５月14日
最終学歴　鹿児島大学医学部医学科
前　　職　鹿児島大学助手医学部
担当科目　生理学
【抱負】
これからも最善を尽くして頑張りたいと思います。よろしくお願いします。

新任教官紹介

職　　名　教授
氏　　名　沖　壽　子（おき　とし　こ）
（医学部保健学科）
学　　位　博士（社会学）
生年月日　昭和13年10月１日
最終学歴　専修大学大学院文学研究科
社会学専攻博士後期課程
前　　職　佐賀医科大学教授
担当科目　地域看護学
【抱負】
　地域特性を活かし、市民が理想とする地域ケア・システムの構築を、教育・研究をとおして取り組んでまいりたいと存じます。

職　　名　講師
氏　　名　鳥　越　郁　代（とり　ごえ　いく　よ）
（医学部保健学科）
学　　位　修士（文学）
生年月日　昭和34年７月26日
最終学歴　玉川大学大学院文学研究科
教育学専攻修士課程
前　　職
担当科目　助産診断学、助産ケア論Ⅰ
【抱負】
　１年半イギリスで助産学を学び帰鹿いたしました。その経験をいかしながら、助産婦の魅力を多くの方に伝えていければと思っています。

職　　名　講師
氏　　名　下　鶴　哲　郎（しも　づる　てつ　ろう）
（医学部附属病院脳神経外科）
学　　位　博士（医学）
生年月日　昭和32年９月28日
最終学歴　鹿児島大学医学部医学科
前　　職　鹿児島大学助手医学部
担当科目　脳神経外科
【抱負】
　鹿大出身で脳血管外科をやっております。工学部明石研究室との共同研究を臨床へ応用すべく努力しております。

職　　名　講師
氏　　名　井　尻　幸　成（い　じり　こう　せい）
（医学部保健学科）
学　　位　博士（医学）
生年月日　昭和37年３月14日
最終学歴　鹿児島大学大学院医学研究科
前　　職　鹿児島大学助手（医学部医学科）
担当科目　理学療法学専攻　整形外科学
【抱負】
　最新の医学研究に広く情報を求めながら患者に対して人間的に接することのできる医療従事者、医学研究者を育てたいと考えています。

職　　名　講師
氏　　名　衛　藤　誠　二（え　とう　せい　じ）
（医学部附属病院リハビリテーション科）
学　　位　博士（医学）
生年月日　昭和38年10月18日
最終学歴　鹿児島大学医学部医学科
前　　職　鹿児島大学助手医学部
担当科目　リハビリテーション医学
【抱負】
　リハビリテーション医学における診療、教育、研究に貢献できるよう、力を尽くします。

職　　名　教授
氏　　名　伴　清　治（ばん　せい　じ）
（歯学部歯科理工学講座）
学　　位　歯学博士、博士（工学）
生年月日　昭和26年７月10日
最終学歴　名古屋工業大学大学院工学研究科修士課程
前　　職　愛知学院大学歯学部講師
担当科目　歯科生体材料、歯科器械
【抱負】
　鹿児島大学歯学部における歯科理工学の教育・研究を通して、歯科医学の発展に寄与したいと思っています。よろしくお願いします。

新任教官紹介

職　　名　教授
氏　　名　内藤正美（ないとう まさよし）
（工学部生体工学科）
学　　位　理学博士
生年月日　昭和19年３月12日
最終学歴　東京工業大学大学院理工学研究科博士課程
前　　職　㈱日立製作所基礎研究所研究主幹
担当科目　非平衡開放系概論、非線形ダイナミカルシステム論

【抱負】
前職である企業では「顧客満足」が重視されます。大学では、直接の顧客は学生ですから、学生が満足する教育・研究をします。

職　　名　助教授
氏　　名　梨啓和（たかなし ひろかず）
（工学部生体工学科）
学　　位　博士（工学）
生年月日　昭和42年12月25日
最終学歴　横浜国立大学大学院工学研究科博士課程前期
前　　職　大分大学助手工学部
担当科目　生体環境化学、微生物工学、生体工学英語、応用化学工学英語、生体環境リスク特論（生体工学専攻）

【抱負】
社会に貢献できる教育・研究を心がけ、鹿児島大学の歴史・伝統を汚さぬよう専一努力いたす所存です。よろしくお導きください。

職　　名　助教授
氏　　名　山本淳（やまもと あつし）
（水産学部水産学科）
学　　位　博士（農学）
生年月日　昭和30年８月12日
最終学歴　東京大学大学院農学系研究科修士課程
前　　職　山梨県水産技術センター忍野支所研究員
担当科目　水族防疫学

【抱負】
鹿児島大学に魚病研究の新たな拠点を築く手助けができれば幸いです。錦江湾と桜島、旨い魚と芋焼酎、今のところ気分は最高。

職　　名　助教授
氏　　名　曽我和弘（そが かずひろ）
（工学部建築学科）
学　　位　博士（工学）
生年月日　昭和46年６月27日
最終学歴　鹿児島大学大学院理工学研究科博士後期課程
前　　職　日本学術振興会特別研究員
担当科目　建築環境工学

【抱負】
環境に優しい建築づくりを目指して、教育と研究に力を尽くしたいと思います。

職　　名　助教授
氏　　名　佐野雅昭（さの まさあき）
（水産学部海洋社会科学）
学　　位　博士（水産科学）
生年月日　昭和37年５月24日
最終学歴　東京水産大学大学院水産学研究科修士課程
前　　職　東京水産大学助手水産学部
担当科目　海洋経営経済論等

【抱負】
鹿児島には初めて来ました。東京とは全く違う自然の色彩や気候、風景などに新鮮な驚きと喜びを感じています。精一杯頑張ります。

総合研究博物館

総合研究博物館長　大塚　裕之

黄鉄鉱に置換されたアンモナイト化石

総合研究博物館は、国立大学の博物館では７番目に設置され、この４月からスタートしました。博物館の組織は資料研究系と分析研究系に分かれています。資料研究系には学術標本の調査・収集・分類・保存・管理等を行う３名の教官が、分析研究系では分析機器を利用したＤＮＡ試料等の分析技術の開発を行なう２名（１名はこれから公募）の教官が研究に携わっております。今後、学内兼務教官、学外協力研究者さらにはボランティアを公募し、５名の専任教官ではカバーできない分野を支援していただく予定です。

鹿児島大学には、半世紀以上にわたって収集され研究された135万点以上の貴重な学術標本が集積されています。これらの膨大な数の学術資料を一元化し、維持・管理して多くの教官が教育・研究に利用できるように、また教官、学生さらには一般の方々が展示を通じて貴重な標本に触れ、情報を得ることができるように、博物館スタッフは最善を尽くす所存です。

機器分析センター

機器分析センター長　村田　長芳

鹿児島大学機器分析センターは平成13年度文部科学省の省令において総合研究博物館と共に認可され、新たに鹿児島大学の教育研究センターに加わりました。本センターは科学の高度化、細分化が進んでいる現状に鑑み、教育・研究機関としての鹿児島大学がどういう風にこれに対処するかを模索する中で行きついた答えの一つの方向であったと考えます。高額で複雑な教育・研究機器装置を一箇所に集中管理し、これに研究を支援する優れた技官を配置して研究の効率化を計るところにあります。

鹿児島大学機器分析センターの構成はセンター長（併任）、助教授の２教官と３人の技官からなり、大学本部のある郡元キャンパスにセンターを、医学部・歯学部のある桜ケ丘キャンパスに分室を設置しました。本年５月14日にセンターの看板設置式をおこない、これからセンターの建物建設、機器の集中管理に向けての努力を開始しますが、現在本センターに各学部から登録されている研究機器・装置は19に及びます。

センターは研究者支援に加え、研究者を側面サポートをする質のよい技官の確保養成も併せて行わねばなりません。実験、質の良い研究の数多い学会発表、論文化、それの社会への還元のすべてにわたる支援、これが本センターに課せられた当面の使命であると考えております．さらに、本センターは鹿児島大学の研究者だけのものではなく、地域に開かれた機器分析センターとして学外の研究者との積極的な交流も計り、共同研究、研究支援も行なって行きたいと考えております。皆様のご支援をお願い申し上げます。

学生部（教務課・学生課）移転に伴う学生サービス

本年４月から学生部が事務局に一元化され、また、従来各学部で行っていた入学料の授業料・免除業務や奨学金業務等を学生部に集約化したことに伴い、教務課と学生課が学生にとって利便性の高い共通教育棟１号館に移転しました。

この度の移転は、学長主導の下、大学改革の一環として、学生に密着型の大学を目指し、学生が利用しやすい環境づくりと学生の視点に立った学生サービスの向上を図る観点から、学生と職員とが身近に感じ取れるようオープンカウンター方式をとり入れました。

また、職員はネームプレートを付け職員の責任感と学生サービスに対する意識の向上を図るとともに、「親しみやすい窓口対応を目指して！」を標語に、先ず握手・自己紹介から始めるなど、学生が気軽に対応・相談できる雰囲気つくりに取り組んでいます。

皆さん、カウンター越にどんなことでも気軽に声を掛けて下さい。

大学の情報公開窓口ができました

行政機関の保有する情報の公開に関する法律（いわゆる情報公開法）に基づき、鹿児島大学でも今年の４月１日から、行政文書の開示請求ができるようになりました。

情報公開法に基づく鹿児島大学の情報公開についてＱ＆Ａ

Q どんな人が請求できるの

A 誰でも開示請求をすることができます。

Q どんな文書を見ることができるの

A 大学が持っている行政文書であれば原則としてすべてお見せすることができます。（例外として、個人のプライバシーに関する情報などは、開示できない場合もあります。）

Q 自分の入試情報やカルテは見せてもらえないの

A 情報公開法ではたとえ本人の請求であっても、個人情報をお見せすることはできません。ただ、入試情報や医療情報は本人にとって関心の高い情報ですので、鹿児島大学では、原則として本人が請求した場合に限って、その本人の情報をお見せする制度を別に用意してあります。

Q 開示請求をしたらお金がかかるの

A 法令で定められた金額がかかります。開示請求の際に300円。実際に文書を見るときに、その量や種類に応じた金額が必要です。

鹿児島大学の情報公開窓口は事務局の３階にあります。何かご質問がございましたら、お気軽に下記までお問い合わせください。

鹿児島大学総務部総務課文書広報係　099－285－7035

入試情報開示制度について

情報公開は時代の要請であり、国立大学もまたこのような状況のなかで、自己の保有する情報の公開について早急かつ真摯に検討し、積極的に対応することを要請されており、なかでも入試情報はとくにその開示が強く求められているところです。

「行政機関の保有する情報の公開に関する法律」の制定に伴い、平成11年６月16日付けで示された国立大学協会の「国立大学の入試情報開示に関する基本的な考え方」に基づき、鹿児島大学でも入試情報の開示について入学者選抜管理委員会等で検討を行い、平成13年度入試から入試情報の開示を開始しました。

平成13年度入試に関して開示する入試情報項目及び開示内容は、次のとおりです。

１．採点・評価及び合否判定基準について

・各学部・学科（募集単位）が課している大学入試センター試験、個別学力検査等の配点を開示
・論述問題（小論文を含む）、実技検査及び面接試験の一般的な採点・評価のポイントを開示
・一般選抜の合否判定は、大学入試センター試験及び個別学力試験成績の総合得点で行うことを開示
・特別選抜の合否判定は、学力検査試験、面接、調査書、小論文、実技、その他関係書類により、総合的に評価するか、又は、点数化し総合得点で評価するかを開示

以上の採点・評価及び合否判定基準の内容は、平成13年度の「学生募集要項」に掲載しました。

２．合格者の最高点・最低点および平均点について

各学部・学科（募集単位）ごとに合格者の最高点、最低点、平均点を開示することで、平成14年度の「入学者選抜要項」に掲載します。

３．正解・解答例について

教科・科目問題及び論述問題（小論文を含む）の正解・解答例又は出題意図を合格発表後に請求に応じて提供しています。

４．試験成績について

・得点

一般選抜については、大学入試センター試験及び個別学力検査等の総合得点を開示

特別選抜については、学力検査試験、面接、調査書、小論文、実技、その他関係書類を点数化し総合得点で選抜を行っている場合、総合得点を開示

・順位

合格者、不合格者それぞれ３段階に区分してランクで開示

以上の試験成績については、本学の受験者本人の請求に基づき入試課で平成13年６月１日から７月31日（土・日・祝祭日を除く）まで閲覧により開示しました。

５．調査書について

調査書については、「指導上参考となる諸事項」及び「備考」欄の記載を除いて、本学の受験者本人の請求に基づき入試課で平成13年６月１日から７月31日（土・日・祝祭日を除く）まで閲覧により開示しました。

学内だより

図書館だより

平成13年度鹿児島大学附属図書館貴重書公開

鹿児島大学附属図書館では、平成11年度から大学公開の一環として市民の方々に附属図書館が所蔵する貴重な郷土の文化遺産である「玉里文庫」を公開してきました。

平成11年度は「薩摩の文化遺産　玉里文庫展」、平成12年度は中央図書館において「江戸のまなざし　薩摩の名所図会展」、鹿児島県立図書館奄美分館（名瀬市）において「薩摩の文化遺産　玉里文庫展」を開催しました。

今年度は「江戸の趣味生活　薩摩の大名文化（重豪（しげひで））の時代」展を下記のとおり開催する予定です。

鹿児島大学中央図書館　平成13年10月24日(水)～10月30日(火)
川内市歴史資料館　平成13年11月8日(木)～11月11日(日)

「玉里文庫」は薩摩28代藩主島津斉彬の弟である島津久光が蒐集した１万８千９百余冊に及ぶ和書、漢籍、文書等であり、鎌倉時代以来800年近く続いた島津氏の歴史に関する書物と江戸時代の大名文化に関する貴重な書物が数多く含まれています。西国雄藩島津の学芸趣味がどんなものであったかを文献資料などで再現するのが本年度の展示です。今回は「島津重豪」に焦点をあて約40点を展示する予定です。

また、展示会開催にあわせて、両会場において原口泉先生（法文学部）、高津孝先生（法文学部）、日隈正守先生（教育学部）の講演も予定しています。

この機会に貴重な郷土の文化遺産である「玉里文庫」をご覧ください。　［附属図書館］

『成形図説』
島島津重豪が曾槃・白尾国柱らに命じて編纂させたもの。農業慣行や制度を始めとして草木・魚介・昆虫・禽獣に関する名称の由来と考証を説き、その採取法・利用法など実際的な知識に言及する。近世薩摩の 物産学の集大成と呼ぶに相応しい編纂物である。

＊島津重豪（1745－1833）島津家第25代藩主

『新知識の探求者であり23歳のとき「南山俗語考」（中国語学書）を著し、蘭学や本草学にも熱心で鹿児島城下吉野村や大島に薬園を設け、緬羊の飼育、毛織の研究をし「鳥名便覧」、「琉球産物志」、「成形図説」、「島津国史」、「麑藩名勝考」、「質問本草」、「薩藩名勝志」、「薩藩名勝百図考」、「琉客談記」などの編纂は重豪の意にでたもの。』（「国史大辞典」　吉川弘文館より）

動物病院の紹介

農学部附属動物病院　院長　阿久沢正夫

われわれの動物病院は鹿児島市の真ん中にあります。そのため、市内の人にもあまり知られていないようで、特別な動物だけを診療していると考えている人もおられるようですが、そのようなことはありません。町中にあるために、対象動物は主に犬、猫、時々ウサギ、ハムスター、小鳥などの小動物ですが、馬、牛、山羊なども診察しています。診療は月曜から金曜の、毎日９時から４時30分まで受け付けています。

月曜日は坂本先生（外科研究室）、火曜日は三角先生（外科研究室）、水曜日は出口先生（附属動物病院専任）、木曜日は阿久沢（内科研究室）、金曜日は大石先生（内科研究室）と川崎先生（生理研究室）です。金曜日の川崎先生は神経系疾患の専門家として最近診療を始めました。また、今年の３月に長年の念願であったＸ線ＣＴスキャン装置が設備されました。いずれも今後の活躍が期待されます。

動物病院の先生にお世話になっていますが、暑いので眠くてたまらない。失礼します。

昨年の７月から、「犬猫と共生できる社会をめざす会、鹿児島」というボランティア団体が認定した動物について去勢と避妊を始めました。この団体は飼主のない動物をなくそう、と活動しておられます。飼主のない猫は野良猫とよばれますが、最近は「町猫（マチネコ）」とよばれるようになり、町の景色の一部と考えている人もおられます。餌を与えて回る人も少なくありません。このような動物が人と仲良く暮らすためには、無制限に数が増えないようにすることも重要です。そのため、われわれは地域貢献になればと考えて、このボランティア団体の活動に協力することにしました。

行事予定 schedule

10月

2日　公開講座「大学博物館への誘い」（3日　まで）（総合研究博物館）
10日　鹿児島県大学ガイダンスセミナー
13日　公開講座「家庭で生かす看護方法」（医学部）
14日　公開講座「Active Aging ―リハビリテーションからケアまで―」（宮崎市）（医学部）
20日　公開講座「家庭で生かす看護方法」（医学部）
21日　公開講座「生涯スポーツ講座（スコティシュ・カントリー・ダンス）」（医学部）
24日　貴重書公開「江戸の趣味生活　薩摩の大名文化（重豪）の時代」展（30日　まで）（附属図書館）
27日　農学部附属家畜病院主催動物慰霊祭（農学部）
公開講座「こどもたちに伝える森のしくみ」（28日　まで）（農学部）

11月

8日　貴重書公開「江戸の趣味生活　薩摩の大名文化（重豪）の時代」展（川内市）（11日　まで）（附属図書館）
10日　大学等地域開放特別事業「森と遊ぼう」（農学部）
15日　大学祭（19日　まで）
11日　公開講座「生涯スポーツ講座（スコティシュ・カントリー・ダンス）」（医学部）
12日　大学等地域開放特別事業「こども森林教室」（16日　までと、19日　）（農学部）
13日　九州・沖縄地区国立理学部長会議
25日　公開講座「Active Aging ―リハビリテーションからケアまで―」（那覇市）（医学部）
公開講座「健やかな人生のための歯科医療」（歯学部）

12月

5日　社会人等特別選抜

1月

19日　大学入試センター試験（20日　まで）

2月

3日　公開講座「口と心身」（歯学部）
25日　前期日程一般選抜（26日　まで）

3月

12日　後期日程一般選抜（13日　まで）
25日　卒業式

編集後記

広報誌を含めた広報活動を強化するため、本年度広報委員会の組織見直しが行われ、新広報委員会のもとに企画、渉外広報、広報誌編集およびネットワーク利用広報の４専門委員会が設けられました。これに伴い新広報委員会が広報誌編集の基本方針を決め、それに沿って広報誌編集専門委員会が編集作業を行うことになりました。親しまれ読みやすい鹿大広報をめざして努力しますので、みなさまのご指導ご支援よろしくお願いいたします。

本年度の鹿大広報は１回増やして４回の発行を予定しています。その最初の鹿大広報157号をお届けします。本号では特集記事として、五つの全学合同研究プロジェクトを取り上げました。いずれのプロジェクトも、地域や社会が抱えている問題解決への貢献と地域・社会に開かれた大学をめざして、学部を越えた研究者の取り組みとして立ち上げられたものです。学長にはこれらのプロジェクトの意義について述べていただきました。お忙しいなか原稿を寄せていただいた学長、ビジュアルで読みやすい原稿を作成していただいた各プロジェクトの代表者（または事務責任者）の方々に感謝いたします。

学内だよりでは、本年４月に総合研究博物館と機器分析センターが設置されたこと、大学の行政文書開示のための情報公開窓口ができたこと、多数の新任教官を迎えたこと、サークル、学内施設などについて紹介しました。ご多忙のなか原稿をお書きいただいた執筆者の方々に御礼申し上げます。

今年の夏は暑さの記録がつぎつぎに更新され例年にない酷暑になっています。ご自愛ください。暑中お見舞いとさせていただきます。

広報誌編集専門委員会委員長　下川　悦郎

●鹿大広報　第157号　平成13年７月31日発行
●編集・発行　鹿児島大学広報委員会

◆本誌に関するご意見・ご感想を下記までお知らせください。
住所：〒890-8580　鹿児島市郡元１丁目21番24号
電話　099-285-7035　FAX　099-285-7034
メールアドレス
sbunsho@kuasmail.kuas.kagoshima-u.ac.jp